
大地に祈りを

葉琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大地に祈りを

【Nコード】

N1531U

【作者名】

葉琉

【あらすじ】

辺境にある神殿に、王太子の元婚約者が『療養』という目的で訪れることになった。神殿内は大騒ぎになるが、自分たちとはほとんど接することはないだろうと思っていた神官見習いのリタとシモーネ。ところが、たくさんの護衛や侍女がいるはずの貴族のお姫様が連れていたのは、監視役の騎士だけだった。お姫さまは本当に『療養』に来たのか、騎士の目的は何なのか。見習い神官たちの、ワケありお姫様をめぐる騒動話。

1・貴族のお姫さま

貴族のお姫様が療養にやってくるから、準備をするように。

そんなことを神官長から言われて、辺境にある神殿は大騒ぎになった。

「ありえないくない？　だって、ここ、どう考えても『貴族のお姫様』が住める環境じゃないよ。療養どころか、余計に体を悪くしそう」
神官見習いという名前だが、実質は殆ど下働きであるリタは、同じく見習いのシモーネに向かって言う。

なにしろ、ここは国の中でも一番寒い地域にある神殿である。夏は少しは涼しいが、これから冬に向かうという時期で、まともな人間なら療養になど来るはずがない。

一応温泉もあるのだが、それだって村人と共通、しかも男女区別のないというシロモノだ。やんごとない身分の人が入るにはちよつと——いや、かなり問題があった。

神殿の建物にしても、外観は立派だが、中身はぼろぼろ。

神官長が、時々修理費を中央に申請しているようだが、全て却下されている状態で、あちこち雨漏りはしているは、すきま風は入るはで、暮らしにくいことこの上ない。

近くにある村も、最近では人が減ってきているから、治められる寄付金も減っているし、中央からの援助金もわずかばかり。

とても修理など出来る状況ではない。

貴族のお姫様というからには、それなりの暮らしをしているはずだ。こんなぼろぼろの場所に、そんな人間が療養目的で来るだろうか。

やはりありえない気がする。

「聞いた話だと、訳ありってことらしいよ」

昔は美しかっただろうが、今は曇ってしまつて見る影もない床を、ごしごしと擦りながらシモーネは意味ありげに笑った。

彼女は、神官長であるブルクハルトの仕事を手伝っているから、その辺りの事情を聞いたのかもしれない。

もつとも、所詮辺境の神殿。住んでいるのは神官長を含め、たったの5人だ。

通いでまかないを手伝ってくれている近くの村の人間を含めても6人。皆、お互いのことを知り尽くすほど長く一緒に生活しているせいか、中央の神殿ほど身分や地位に厳しくない。

神官長であるブルクハルト自身が、どこかのほほんとしていて大抵のことには動じない人で、面倒なことも好きではないから、実際の神殿に比べ、ここはかなり規則も緩いのだ。

よほどのことがないかぎり、大抵の情報は皆で共有しているから、シモーネに聞かなくても、すぐに誰かから同じ話を聞くことになつただろう。

「訳ありつて？」

「中央の神殿に、神子が降臨されたつて話、前に聞いたでしょ？」

シモーネの言葉に、そういえば、ブルクハルトがそういうことを言っていた気がすると数ヶ月前の記憶を引っ張り出しながら、リタは頷いた。

神子が降臨しようが、中央で大神官が変わろうが、ここには影響がない。どうせ他人事という気持ちで、聞き流していたのだが。

「で、その神子様、この国の王太子殿下と結婚することになったらいいのよ」

「あれ？ 王太子殿下つて、婚約者がいなかったっけ？」

リタの記憶が正しければ、大臣を務める有力貴族の娘が王太子の婚約者だったはずだ。

「それが、婚約者だった人は体を壊して王妃には相応しくないつてことになつたらしいのよ。王太子が神子に夢中になつて婚約者を捨てたから、それで病氣になつたとか、割と普通に噂になつてる」

シモーネは神殿や王宮で使われる古代語もきちんとしゃべれるから、神官長について王都に行くことも多い。元々噂好きというのもあって、中央の噂話や面白い話を仕入れてくるのだ。

「本当のところはわからないけどね。で、ここへ来るのが、その元婚約者様ってことらしいんだよ」

「うわー。なんだかいろいろどろどろしてる。その人、都合が悪いからここに押し込められるってこと？」

「どうなんだろう。それなりに身分があるから、噂が収まるまで隠れているのかもしれないし」

確かに、三角関係（想像だが）の末に王太子に捨てられたなどという話が囁かれていれば、今後の縁談にも差し支えるだろう。

「それだったら、他にもいろいろ場所はありそうだけどね」

「ここは中央からかなり離れているし、周りは山に囲まれて出入りも限られているから、隠れるには丁度いいのかもよ。どっちにしても、侍女やら護衛やら連れてくるんじゃないの？」

言われてみれば、その通りだった。

いくらなんでも、それほど身分がある女性が、1人で療養ということはあるえない。

あまりにも辺境すぎて盗賊の類は出ないが、森や山には魔物や魔獣が住んでいる。道の整備は中央ほど整ってはいないから、うっかり迷い込むと、そのまま行方不明など、よくある話だ。

「貴族のお姫様っていうのも、大変だね」

神官は結婚不可というわけではないから、恋愛も結婚も自由だ。

二人はまだ見習いという身分のせいかな、当分の間はそういうことは関係ないと考えているが、将来もしするとしても、家に縛られてということはあるえない。

よほどろくでもない相手でなければ、反対されることがないというのが、一般的な庶民の実情だ。

「でも、面倒だよな。侍女って行っても、きっと私達よりも身分は上だろうし」

王太子の元婚約者というくらいだから、貴族でも上位の者だ。そういうところには、下級貴族の娘が礼儀作法などを習う目的で仕えたりするらしい。

「言う通りにやってれば、なんとなるんじゃないの？　というか、きつと私たちなんて、お姫様の顔を見ることがさえないんじゃないかな」

下々のものだと言ってシモーネが笑う。

それもそうか、と納得したようにリタも笑い、二人は床磨きの作業に戻った。

いくら温厚な神官長でも、夕方までに掃除が終わっていないければ、さすがに怒るだろう。この年になって夕飯抜きなんて、恥ずかしい。

だが、リタたちの予想に反して、やってきたのは、質素な服に身を包んだ綺麗な女の人と、略装ながら騎士の格好をした男の人だけだった。

2・お姫さまの事情

「はじめまして。これからよろしくお願いしますね」

そう言われ手を差しだされて、リタもシモーネも面食らった。

例の高貴なお姫様は、着いて神官長に挨拶した後、まっすぐにリタたちのいた台所にやってきたのだ。

「年の近い方が二人もいると聞いて、友達にならねばとすぐに思ったのです」

普通、そんなことは思わないのではというのがリタたちの正直な感想だ。

リタもシモーネも、平民の出である。神官見習いとして神殿に上がる前は、村で両親を手伝って土にまみれて畑仕事をしていた。

神殿で礼儀作法は習っているが、あくまでそれは一般的な作法で宮廷で通用するようなものではない。

いきなり何の前触れもなくやってきたお姫様を前に、何をどうすればいいのかわからないのが現状だ。

「あら。わたくし、間違えましたかしら？」

いつまでたつても固まったまま動かない二人に、お姫様は眉を潜める。

「握手は、初対面の人と友好を深めるのに必要だと聞いたのですが」
悲しそうなお姫様の言葉に、最初に反応したのはリタだった。

「ち、違います。違わないけれど、違うんです！ 私たち、お姫様がこんなところへ来られるとは思わなかったから、驚いてしまって」
言い訳がましいとは思ったが、他にいいようがない。

お姫様はすぐに、神殿で一番の客室に引っ込んで、外に出てこないものだと思い込んでいたのだ。

着替えやお茶だって、きっと自分ではしないはずだと。

侍女がいらないようだから、その役目は自分たちになりそうで、作用もしらない自分たちには荷が重いよね、と話していたところだっ

たのである。

「あまりかしこまらないでいただけると嬉しいのですわ。わたくし、もう侯爵家の令嬢ではありませんもの。ついこの間、親に勘当されたばかりですよ」

にこにこ笑いながらあっさりと言われて、ますますリタたちは困惑する。

「ですから、わたくし、さきほど神官長に、あなたたちと同じ神官見習いとして扱って貰うようお願いしてきたのですわ。まあ、実家の事情で、余計なものがひとつついてきていますけれど、あれはわたくしの逃亡防止が仕事ですから、無視してくださいさってかまいません」

逃亡防止という言葉に、リタとシモー又は顔を見合わせた。何故逃亡防止なのか。

「いたいこのお姫様は何をやらかしてしまったのか。」

「それで、わたくしとはお友達になってもらえるのでしょうか？」
さきほどとは打ってかわった不安そうな目差しに、リタとシモーネは再度顔を見合わせる。

お姫様の事情はわからない。

本心から言っているのかどうかも、不明だ。

けれども、嘘をついているようにも見えなかった。

考え込んでしまった二人だが、先に行動を起こしたのも、やはりリタだった。こういうとき思い切りがいいのは、いつでもリタの方である。

「私達、あまり作法とかわからないし、言葉遣いも乱暴だけど、それでよければ」

「かまいませんわ」

お姫様の顔が、ぱつと明るくなる。

華やかな笑顔に、同性ながら、ときどきしてしまう。

「わたくしも、堅苦しいことは大嫌いですが」
改めて差しだされた手を、二人が順番に握る。

その手は、思いのほか固く、骨張っていて、とても貴族のお姫様のものとは思えない。

これは、普段から固いものを握っている手だ。鍬だとかはありえないだろうから、まさかと思うが剣なのだろうか？

「ああ、名乗るのを忘れていましたわ。わたくしは、シャルロッテ。シャルと呼んでいただけると嬉しいですわ」

「私はリタです。こっちがシモーネ」

「リタに、シモーネですね」

覚えましたわと微笑むお姫様は、無邪気な子供のようにだった。

リタとシモーネはお姫様とはすぐにうち解けた。

お姫様は意外に庶民的だったのだ。

いやむしろ、貴族の令嬢とは思えないくらい、普通な人だった。

台所仕事も畑仕事も、文句ひとつ言わずこなしている。料理はやや苦手のようだが、楽しそうにやっているから、そのうち上達するだろう。

お姫様と親しくすることに対して、神官長がうるさく言うかと思っただ、ただ先輩として指導をよろしくお願いしますねと言ったきりだ。特に注意する様子はなかったから、神官見習い同士仲良くしろということなのだと、勝手に解釈している。

お姫様についてきた騎士も、何も言わない。

お姫様が神殿内で何をしようと我関せずという様子だ。彼が動くのは、お姫様が神殿の用事で外に出るときで、どんなに近場でも必ずついてくる。

最初に言っていた逃亡防止という言葉は本当なのかもしれない。最初には言っていた逃亡防止という言葉は本当なのかもしれない。

もっとも、騎士は、護衛や監視のはずなのに、誰よりも外出を喜んで、あれこれ周りのことを知りたがるのが不思議だったが。

そして、シャルが神殿暮らしに慣れてきて2週間。

夕食の下準備をしながら、彼女は自分がここへ来ることになった理由をリタたちに話していた。

「駆け落ちしようとして、失敗して、この有り様なのですわ」

腹立たしげに人参をぶつ切りにしながら、シャルが溜息をつく。

「駆け落ちって……誰と？」

リタは面食らったように問い返した。ジャガイモを剥く手も止まっ
てしまっている。

「もちろん、フェリクス——王太子殿下ですわ」

「ええ！」

シモーネが思わず包丁を落としてしまった。

「フェリクス様は、王太子をおり、私と生きることを誓ってください
いました。ソレがばれて、この有り様です」

こんな辺境に押し込まれたくらいだから、何かやらかしたのだ
ろうとは思っていたけれど、これは予想外の話だった。

「ついてきた騎士は、見張りだと言いましたよね。わたくしがフェ
リクス様を奪い取りに行かないように監視しているのです」

神子と王太子の結婚式が無事に終わるまで、この遠く離れた地に
押し込めておこうというのが、現国王と神殿側の意向らしい。

「でも、こっちに伝わっている噂では、王太子殿下と神子様は愛し
あっているとか——」

それで、元からの婚約者を捨てたと言われている。

真相は違うのだろうか。

「そんなの、神殿が流したでっちあげの噂です」

どん、と包丁が南瓜を叩き切った。

見事に二つになった南瓜が、音を立てて床に転がる。

リタとシモーネは、下ごしらえをするのも忘れて、シャルに見入
っている。そのくらい、迫力があつた。

「もちろん、頭では、私もフェリクス様もわかっているのです。神

子との結婚は政治的にも対外的にも意味あることで、愛など必要ないものだ。だから、割り切って、わたくしたちは婚約を解消したのです。そして、伝説通りに王太子殿下と神子が婚約しました」

この国には、太陽神の血を引くとされる王の祖先が苦境に陥った時、月の女神の使者である神子によって救われたという伝説がある。神子はのちに王の祖先と結婚し、彼と共に国を繁栄に導いたという。

そういう伝説があるせいなのか、神殿側と王族の思惑があるためなのか、何百年かに一度の割合で現れる神子は、王族と神殿が保護することになった。

神子の意思はどんなことでも優先され、彼女が不自由なよう生活を保障する。

そういう過程を経て、いつのまにか、神子は王太子、あるいは王と婚姻関係を結ぶようになっていったのだ。

そして、今回、五百年ぶりに神子が降臨したことで、当然のように王太子が彼女を娶ることになってしまった。
だが。

「わたくしと婚約を解消した後、殿下はどんどんおやせになるし、気持ちが悪くなるのかへ部屋に引きこもりがちになるし、このままですと倒れて病気になるのも時間の問題だったのです。元々、気が弱くて人の意見に流されやすい性格で、王太子になったときも、大丈夫なんだろうかと、わたくし、大層心配したものですわ」

だから、あの方をお護りするために強くなりましたのよ、とシャルは晴れやかに笑う。

「あの方の側にいるのであれば、側室でも正室でも全然構わなかったのですが、神に使わされた神子と結婚するのに、側室などありえないと一喝されて」

王宮には後宮があるくらいで、他国や国内の有力貴族から側室を娶ることも珍しくない。その時によって人数は様々だが、確かに神子が正妃になった時代には、側室は迎えられなかった。仮に、神子

が来る前に側室がいたとしても、全て降嫁させられている。

「側室がだめならば、殿下の下で側近として働くことも考えたのですけれど、それは神子が不安になるからやめると、これも却下されました」

八方手詰まりで、王太子とともに、途方にくれたという。

「殿下が王太子になったのも、わたくしの父の思惑と、寵愛する側室の子供に何が何でも跡を継がせたいという国王陛下の思いが合致して決まったからなのです。残念ながら、どの王子よりも優秀だったからではないと、わたくしも殿下もわかっておりました」

それでも、王太子は、責任を果たすべく必死に努力をしていたらしい。

王宮には、味方も少ない。私生活も、常に暗殺に怯える毎日だった。

その苦しい日々を支えていたのはシャルだったし、王太子も、公私ともにシャルを頼りにしてくれていた。

「神子が王宮にいる魑魅魍魎の如き貴族たちと互角に渡りあえるのなら、フェリクス様をお任せしてもいいと思ったのですが」

そこで、シャルが深いため息をついた。

「神子はお優しく思いやりのある良い方なのですが、どうやら、フェリクス様を理想の王子様扱いされているようで……」

頼り切りでまったく役に立ちません、と言い切った。

が、言い切った後、慌てたようにリタたちを見る。

「あら、わたくしつたら、神子に対して、余計なことを言ってしまうしたわ」

「大丈夫。別に神子様がどうだろうと、私たちには関係ないし」

再び芋の皮をむき始めたリタたちが、心底どうでもよさそうに答える。

さきほどまでの、シャルの話を聞いていた時とは大違いだ。

だから、二人の『関係ない』は本当のことなのだろう。

「おかしい人たちですね。神殿の人間は、皆神子の信望者かと思っ

ていましたわ」

「神子様は神様とは違うし」

リタもシモーネも、神官見習いになる前から神に祈りを捧げて暮らしてきた。

神殿を訪れた時だけでなく、朝や晩、苦しい時や嬉しい時。感謝の気持ちを忘れてはいけないと言う親の言葉通りに。

神様になればいくらでも祈りを捧げるし、敬う気持ちもきちんがある。

けれども、神子は神に使われたというが、神ではない。他の高位の神官のように、祝福を授けてくれたり、病を癒してくれるのなら尊敬するが、信仰の対象とは違うと思っているのだ。

「信望するものにも、よくわからない存在だし」

シモーヌも、首を傾げながら、リタに同意する。

神子と言われているが、彼女が実際に奇跡を起こしたり、何かすごいことをしたという話は聞いたことがないのだ。わからない存在としか言いようがない。

「あと、ここの神殿が大地神を祀るっていうのもあるかなあ。だって、神子様って月の女神の使者でしょ。大地の神と月の女神って、神話の時代から仲悪いしね。この国では太陽神信仰が盛んだから、ほとんどの人が太陽神を信仰してるけど」

「あらあら、わたくしとしたことが、すっかり忘れていましたわ。あなたたちは大地神を信仰する神官なわけですね」

「シャルもでしょう？」

一応、彼女も同じ神官見習いなのだ。

「そうでした。いけませんね、わたくし、ちょっと周りが見えていなかったようですわ。自分が見習いの神殿の神様を忘れてしまうなんて」

「それって、神官長も悪いと思うなあ。詳しいこと、何も言わなかったんでしょ」

リタが苦笑する。

彼女も、最初ここへ来たとき、祭神が大地神だと気が付かなかった。

神官募集中です、衣食住もついていて、勉強も出来ます。そんな甘い言葉に誘われてうっかり来てしまった時は、普通に太陽神殿だと思っていたのだから。

「誰に祈るのは気持ちの問題。なんて言って、教義とかも、自分で勉強してくださいね、だもの」

「でも、良い方ですね。わたくしの神官見習いになりたいという我が儘も、黙って受け入れてくださったのですもの」

療養という目的でいた方が楽だったはずなのだ。

ほとぼりが覚めれば追いついてしまえばいいのだから。

けれども、かまいませんよと笑っていた。それどころか、ずっといてくれてもかまわないとまで言うてくれたのだ。

「感謝しても、したりないくらいです」

そのおかげで、少し冷静になることができた。

ささくれたっていた気持ちが落ち着いたので。

「結局、フェリクス様が倒れてしまって、これ以上政務を続けるのは難しいかもしれない。そう医師から聞いた後、二人とも頭に血が上ってしまったのですわ。何の準備もなく駆け落ちなんて、失敗するに決まっていたのに」

そう言って笑ったシャルの目は、泣いているかのように潤んでいた。

3・神官見習い達の憂鬱

「いろいろと大変なんだね、貴族や王族って」

夕食後、神官長に呼ばれて出て行くシャルの後ろ姿を見ながら、リタは小さな溜息をついた。

貴族たちは、苦勞などないような気がしていた。

奇麗な服を着て、美味しいものを食べて、苦しいことなど何もないと。

けれども、そういう生活をする人たちには責任がある。

シャルの話を聞いて、そのことを知った。

「好きな人と結婚できないのが当たり前って、苦しいね」

それなりに金を持つ商人や領主などでも、ある程度の恋愛は可能だ。説得しだいで、好きな人との結婚も出来る。

親同士が決めた婚約者同士でも、本人たちが神殿や領主に婚約破棄を願い出れば、それに正当な言い分があれば認められることも多い。

だが、さすがに王族や貴族などは、そう簡単にはいかないのだろう。

「シャルのために何かしてあげたいけど、なんにも出来ないよね」

リタたちは、辺境の神殿の神官見習いでしかない。

権力も発言力もない。頭もよくないから、何か知恵を絞ってシャルを助けるという方法も思いつかない。

「友達だって言ってくれたよね。でも、友達として出来ることなんて本当に限られているし」

例えば、愚痴を言い合ったり、一緒に笑い合ったり。

そのくらいなら幾らでもできる。ただ、シャルがそれを必要としているかどうかはわからなかった。

「でもさ、リタ。シャルはきっとこのままここで大人しくしてない気がするんだ」

あれほど王太子のことを心配しているのだ。

何か行動を起こしたとしても不思議はない。一緒についてきた見張りの騎士がどの程度の腕前でどのくらい頭が切れるのかわからないけれど、シャルならば彼をうまく丸め込んでしまいそうな気がした。

「その時にさ。もし私達を頼ってきたら、助けてあげようよ、リタ」

「私は構わないけど。シャルのことだから黙って1人で行きそうじゃない？」

「ああ、ありえそう」

友達に迷惑はかけられないと言って、こっそりといなくなってしまうそうだ。

そんなことになったら、リタたちも悲しい。

例え1人で何かするにしても、絶対に無茶などさせたくない。

「だったらさ、シモーネと私が、もっとシャルと仲良くなるうよ」

シャルの今までの態度を見ると、自分の懐深くまで入ってきた相手を悲しませるようなことを、彼女は望まないのではないかと思う。

それならば。

二人が出来ることは、ひとつしかない。

「そうだよ、私達のこと、簡単に切り捨てられなくなるくらいに仲良くなるう」

本当の友達になるというのは、それほど簡単なものではない。

合う合わないもあるし、貴族と平民では考え方も違うのだ。思いがすれ違うことだってあるだろう。

彼女は自分のことをあれほど話してくれた。適当に誤魔化してもよかったのに、正直に口にくれたのだ。

もしかすると、多少の偽りがあったのかもしれない。

全部が真実かどうか知らない。

ただ、リタもシモーネも、彼女の王太子への思いは信じてよいと思っっている。

あの時、彼女の中に、脆い部分を見てしまったから——なんだか、放っておけなくなってしまうているのだ。

理屈など抜きにしても、すでにリタたちはシャルのことが好きになっっている。

同じように、彼女も自分たちを好きになっしてほしい。

大事な友達の1人になっってくれたらいい。

だからこそ、心の底から笑ってくれる日が必ず来るように、頑張ってみよう。

そんな約束を、リタとシモーネは交わしたのだった。

4・騎士と神官

「のう、若いの」

誰にも見られないようにと、神殿の裏手からこっそり入ろうとしていた青年は、声をかけられ仕方なく立ち止まった。

呼び止めたのは、神官服を着た老人だ。

荒れた庭にぽつんと置かれた石に腰掛け、彼に笑顔を向けている。今の行動を見られたからといって困ることはないのだが、こそこそしていたのは事実なので、どこか気まずい。

「あなたは、ええと、確かアーデルベルト殿、でしたでしょうか」

「覚えていてくれたか。騎士殿」

老人はあまり人前には出ないのか、青年が会ったのは紹介された最初の日だけである。

柔和な顔に満面の笑みを浮かべた姿は、いかにも神官らしいものだ。だが、笑顔にもかかわらず、老神官の視線は鋭い。

ただの人の良い老人というわけではなさそうだ。

「どこかへ、出かけていたのかの？」

「ええ、まあ」

「それにしても、面白いところから入ってこられるのう」

面白いところ、とはおそらく青年が入ってきた、塀が崩れた部分のことだろう。

丁度良い具合に人が1人通れる隙間が出来ていて、ここからすぐに森へ出ることができる。

最近の青年は、もっぱらここを利用している。

元々彼は護衛兼監視としてここに滞在しているのだ。そのためか、彼がどこで何をしていようと、どこから出入りしようと、神殿の間は咎めない。一度、神殿内をうろろろしていたとき、出会った神官長から剣を持ったまま祈りの間には入らないでくださいねとやりわり諫められたくらいだ。

中央にある神殿とは大違いである。

あそこでは、どこに入るのも何をするにも決まりだらけで、面倒で仕方がなかった。

その点、ここはのんびりとしていて、時間の流れも緩やかだ。

「森の中には、魔獣も多い。騎士殿ならば心配はなさそうだが、気をつけなされ。最近では、妙なやつらもうろついておるみたいだからのう」

ほっほっほ、と笑い声を上げ、老神官は目を細めた。

一瞬、森の中でのことを見られたのかと思ったが、あの時自分たち以外の気配はなかった。鎌をかけられているのか、何かを知っているのがわからないが、内心の動揺を悟られないように曖昧な笑みを浮かべる。

「確かに魔獣が多いですね。人が住む場所まで下りてくるのは、飢えているのでしょうか？」

あえて妙な奴らという言葉には反応せず、魔獣のことを強調する。老神官も、それ以上、そのことについては追求してこない。

「そうかもしれないのう。ここ何年かは天候不良のせいで、森の実りも少ない。私達同様生きていかなばならぬとはいえ、難儀なことじや」

魔獣は魔物と違い、知能は低い。人を襲い食べるものもいるが、その殆どは大人しく単純な性格をしている。こちらが何も仕掛けなければ、向こうからは襲ってこないのだが、気が立っているときは別である。ちよつとしたことで暴れ、被害が出ることも少なくはない。

「今のところ、大きな被害は出ていないが、神官長殿も、腕の立つ剣士が1人いればよいのと言っておったか。とはいっても、うちは貧乏だからのう。安い給料で勤めてくれるようなものはなかなかいないとのことじゃ」

確かに、毎日出る食事は質素だし、建物も崩れかけたところがあるにもかかわらず、修繕もされていない。

新たに若い二人が加わったことで、食事の量も増えているのだろ
うし、台所事情は以前よりもさらに厳しいはずだ。初日に滞在費の
名目で寄付金を神殿に納めたが、もう少し渡した方がいいのかもし
れない。

「そうそう、騎士殿。時間があるならば、ちよつとあの子を手伝っ
てくれたら嬉しいのだから」

「あの子？」

「神官見習いのリタじゃ。人手が足りなくてのう、あの子が1人で
神殿裏の畑を世話しておるのじゃ」

そういえば、紹介された神殿の人間は5人しかいなかった。

神官長と、神官が二人。それから神官見習いの少女たち。神官た
ちは高齢で、確かに力仕事は出来ないだろう。

リタというのは、見習いのうち背の低い方だったか。

昨日の夕食後に出された小麦粉で作ったお菓子があまりにも好み
の味だったから、おいしいを連発していたら、変な顔をされたのだ。
こぼれそうなほど大きな目が印象的で、小さな猫を連想させた彼
女は、全体的に華奢で腕も細かったが、そんな少女が畑仕事をして
いる姿は想像できない。

「力仕事や畑の世話は、見習いの子たちがやっているのですか？」

「ああ、そうじゃ。どうしても男手がいるときは、村から誰かにき
てもらうのだが、あちらの方もあまり若者がいないからのう」

「確かに、村には空き屋が多いようでしたか」

シャルロッテが買い出しに行くのに付き合ったのだが、随分と静
かな村だと思った。歩いているのは老人ばかりで、若者や子供とは
たまにしか会わない。あまり作物が採れないせいで、若い者は皆離
れた町に出稼ぎに行っているのだという。

「私がこの神殿に来たころは、もう少しここにも神官たちがいたの
だがね」

懐かしむように細められた目は、遠い過去を思い出しているのか
もしれない。

ここ数年、太陽神や月の女神以外の神を信仰するものは減っているという。

太陽神は、昔から信仰する者が多く、王族が彼らを庇護していることもあり、組織としてそれなりの体勢を整えている。あちこちに建てられた神殿には、今でも多くの参拝者や神官を目指すものが途切れないというし、神殿があることで町も賑わう。

その反面、各地に散らばっていた太陽神以外を祀る少数派の神殿は、さびれていった。

あまり横の繋がりもなく、各々の神殿が独立していたことも理由かもしれない。

かつては対等であつたはずの他の神たちの神殿も、存続のために太陽神殿と結びつき、いつのまにかその下部組織として扱われるようになっていったのだ。

「時代の流れかも知れぬが、寂しいことじゃ」

彼の言うように、このまま新たな神官見習いが現れなければ、この神殿もやがては忘れ去られてしまうのかもしれない。穏やかに流れる空間を居心地よく思いはじめていた青年にとっては、残念に思えてならなかった。

「騎士殿。気が向いたらでいい。あの子たちを助けてやってくれ」

老神官はそう言つて、ゆっくりと立ち上がった。

「そろそろ、私は失礼しようかの」

気が付けば、日が傾いている。

思ったよりも、青年と老神官は話し込んでいたらしい。

「そうそう、騎士殿。あまり無理などせぬ方がよいぞ。1人で何もかもやるには、ここは広すぎる」

どこまで知っているのか——老神官はそう言い残して、建物の中へと消えていった。

5・神官見習いと騎士

上半身裸の騎士、というのはあまり見る機会がなかったが、確かに無駄なくついた筋肉が美しい。

奇麗だなあと、彼の汗ばんだ背中を眺めながらリタは思う。

騎士は鍛え方が違うのか、引き締まった体は痩せすぎず太りすぎずで、本当に理想的である。彼がきびきびと動く姿も気持ちいい。どんな小さな動きにも無駄がなく、つい見惚れてしまうのだ。

ちなみに、今の彼はここへ来た時の格好ではない。

略装とはいえ、騎士らしかった服装は最初だけで、翌日からは麻のシャツとズボンという地味な姿になってしまった。持っていていたはずの剣さえも見あたらない。

シャルの監視役のはずなのに、最近はそちらは放っておいて、神殿の裏にある畑で鍬を握っていることが多いのだ。

きっかけは、数日前。

1人で畑の世話をしているリタを見つけた彼が声をかけてきたのが、始まりだった。

人手が足りないというリタの言葉に、じゃあ俺が手伝うよと言われ、気が付けばこの状態だ。畑仕事以外にも、何かと手を貸してくれるので、ありがたい反面少しばかり不気味だった。

「耕しおわったけど、次、どうすんの？」

汗を拭いながら、彼が振り返る。

人懐っこい笑顔はあくまで爽やかで、これだけ見れば働き者の好青年という雰囲気だ。

何か企んでいるというふうには見え、ただの親切だとうっかり思ってしまったそうになる。

シャルの監視なのだから、仲良くなっではいけないと思うのに、つい一緒に行動してしまうのも、そのせいなのかもしれない。あった。「ありがとうございます。あとは種まきですけど、その前に休憩し

ませんか」

汗ばんだ体が眩しすぎる。

このまま見ていたら、神官見習いにはあるまじき想像をしてしまいそうだった。

「お、今日のおやつは何だ？ 俺の好きなものと嬉しいな」

上着を羽織りながら近づいてきた男——テオドールの目が輝いている。

今日のおやつは小麦粉を練って揚げ、糖蜜を絡めたただけのものが、以前これを食べた彼の反応があまりにも面白かったので、最近よく作るようになってしまった。

どうぞといって差しだと、テオドールは本当に嬉しそうに笑う。

「また、これ作ってくれたんだな」

そう言うと、テオドールは手を伸ばしてその菓子を取った。そのまま、口にいれてしまう。

「あ、手は拭いてください。泥だらけのままじゃないですか」

騎士というのは、いつもきちんとしていると思っていたから、彼のこういう態度には驚いてしまう。

「面倒だ」

「だめですよ。お腹痛くなったらどうするんです」

「俺、結構頑丈だから大丈夫だって。ひどい状況で泥水すすっても平気だったし」

「泥水って……」

忘れそうになってしまいが、彼は騎士だ。今はこうやって穏やかな様子でいるが、元々戦うことが仕事なのである。戦いに出るのは当然のことで、そういう時がいつも清潔だとは限らない。

この国は比較的平和とはいえ、小さな小競り合いが時々起こる。形勢が不利な時、逃げる時。なりふりなど構ってられないというもの、なんとなく理解できた。騎士ではないが、村にも戦いで傷ついて戻ってきた者がいて、その人から戦の悲惨さを聞いたこともあった。

もちろん、実際に経験したことの無いリタには、彼らの苦しみの半分のわからないのだろう。

「そんな顔すんなって。あー、失敗した」

テオドールは気まずそうに笑うと、大げさなくらいに肩を竦めてみせた。

「俺は、そういうことも納得して騎士になたんだからさ。だから、大丈夫なんだって」

それでも、辛くないわけがない。苦しくないわけではないだろう。

「まったく。あんた、結構お人好しだろ」

「え、どうしてそうなるんですか!？」

納得いかない。

今の話の流れでそういうことになるのだ。

だが、目の前の彼があまりにも優しそうに笑うから、反論できなくなってしまう。

「だから、ほっとけなくなるんだよな。ほんとに困る」

困るといいながら、やっぱり困った顔ではない。

どうしよう、と思った。

そう言う彼のことを、好ましいと思いはじめている。気づかないふりをしていたけれど。

彼といるこの時間がとても楽しいと感じているのだ。

テオドールは中央の人で、身分は貴族で、職業は騎士で。

いつかはここからいなくなる人なのに。

「困るんだったら、私の相手なんかしなければいいのに」

そうすれば、リタもこんなふうに心がかき乱されることもない。

彼をただのシャルの監視だと思って無視できるのに。

「最初はそう思ったんだけどさ。やっぱり気持ちには正直でいたいし。それに、今の仕事は楽だからさ。結構楽しんでいるってのもある」

「……見張りのくせに、そんなこと言っていていいんですか?」
言ってしまったから、自分の失言に気が付いた。

シャルから聞いていて知っていたが、彼自身はそのことを誰にもばらしていない。

だが、彼は特に気にする様子もなかった。

「なんだ、姫さんから聞いてんのか。まあ、見張りつていってもなー、金で雇われてやってることだし。もらえるものがもらえて、姫さんがどこにもいかなきゃ、どーでもいいって感じ？」

そんな投げやりなツツコミそうになってしまった。

「俺も一応貴族の出だけどさ。貴族って言っても、名ばかりなんだよ、実家の屋敷だって、ここよりひどい状態だ。両親は老いてるし、家を継ぐ一番上の兄以外は、食いつ持を減らすために、早くから見習い騎士になったり、軍に入ったりしてるよ」

「どこも似たようなものですね。私もそうですよ」

おかしい気分だった。

リタは庶民だが、神官見習いになったのは、テオドールと同じ理由だ。

実家は貧乏で兄弟姉妹がたくさんいたから、親に迷惑をかけないように、早くから家を出たのだ。神官を選んだのも、元々神に祈りを捧げるのは嫌ではなかったし、衣食住も保証されているという理由からだった。

「そんなことを私に話すなんて、変な騎士さま。シャルもだけど」

「おまえだって、変な神官見習いだぞ。姫さん相手に、普通に接してるしさ」

そう言い合って、自然と笑みがこぼれる。

「ここはいいよな。魔獣が多いのが難点だけど、なにより人を殺さなくてもいい。ずっと、ここにいられたらいいのにな」

「……期限があるんですか？」

「んー、まあな。王太子殿下がちゃんと結婚して、子供の1人でも出来たら、お役御免は確定だろ。あるいは、姫さんが刺客に襲われて死んだりとか」

ぶっそんな言葉に、リタは青ざめる。

そんな可能性があるのだとすれば、この神殿で生活するのは危ないのではなだろうか。

入ろうと思えばどこからでも侵入可能だし、住んでいるのは女性と年寄りと貴族の令嬢。

唯一剣をとって戦えそうなのは目の前の騎士だが、1人だけで対応できるとは思えない。

もしかすると、彼自身が刺客と通じているかもしれないのに。

「姫さんは強いからなあ。そんなに簡単に刺客にやられたりしないと思う。それに、姫さんに死なれると俺の本当の雇い主に怒られちゃう」

さらっとそんなことを言い出すテオドールに、リタは目を丸くした。

この人は、いったい何を言い出すのか。

「神殿と国王が雇い主だつて聞いてるんですけど」

「違うよ」

テオドールの様子が、さっきまでの好青年っぽい姿から、ちょっと何かを企んでいますという雰囲気になわっている。

「俺の本当の雇い主は、姫さんの味方。そいつに頼まれて、俺は神殿側の人間のふりをしている。といっても神殿側も俺のことはそこまで信用していないのか、あくまで姫さんの足止め役だけだ」

「ふりつて、そんな。ばれたら大変なことになりませんか？」

「なるかもなー。でも、神殿側は、俺が金次第で動く人間だつて思ってるからさ。今のところ、ばれてない」

簡単に言うが、本当だろうか。

リタは、テオドールのことは殆ど知らない。今日少しか彼の家族の話は聞いたが、中央でどういう階級で、騎士としてどんな仕事をしているのか、わからないのだ。

リタがまだ疑っていることに気がついたのだろうか。

テオドールは、表情を引き締め、真剣な眼差しでまっすぐにリタを見る。

「本当の依頼人って、俺の命の恩人なんだ。金次第で動くこともあるけどさ。あの人の頼みだけは別。絶対に断れないし、裏切れないそんな存在なんだ。その人がさ、頭まで下げて頼むんだよ。姫さんを守ってほしいってさ」

彼の目に、曇りも迷いもない。

真実を語っているからなのか、それともリタを信じさせるための嘘なのか。

前者だと思いたい。

テオドールを疑うのは嫌だった。

彼のことを嫌いになどなりたくないのだ。

「それ、信じていいんですか？ あなたがシャルを傷つけないって、そう思っていていいんですか？」

声が震えているのは、まだ心のどこかで、彼を疑っているからだ。信じ切れていないからだ。

でも。

「信じて欲しいと、思ってる」

こんな顔で懇願されたら、絶対に否とは言えない。

でも、まだ心の中にもややもやしたものが残っているから。返事は返せなかった。

しばらく二人で、空を見上げていた。

雲ひとつない空は青く奇麗で、そんなどろどろしたことが身近で起こっているなど、嘘のようだ。

「なあ」

テオドールが小さな声で呼びかけてくる。

「なんですか？」

そう言っただけの方に視線を向けると、さっきまでとは違う、どこかいたずらっ子のような表情のテオドールがリタを見ていた。

「ところで、何で俺がこんな重要事項、あんたに話したと思う？」

「な、何故でしょうか」

嫌な予感がした。

「共犯者にしまおうかなって」

「勝手にしゃべったのは、あなたじゃないですか!」

「そう。でも聞いちゃったよね」

「忘れます」

「リタって、記憶力いいからね、忘れないでしょ」

「でも忘れます」

「姫さんは友達なんだよね。彼女を守るためにも協力してほしいかな」

そういう言い方はするだろう。

そんなことを言われて、断れるはずがない。

「それに、あんたと一緒に行動して、いろいろ話してみてもいいって、俺が思ったんだ。リタに嘘はついてたくない。そういうのは嫌だって、本気で思ったからさ」

ますます、彼はずるい。

どんどん逃げ道を潰して、最後には頷かせてしまうつもりなのではないか。

「ちよつと、一波乱ありそんなことを小耳にはさんでね。俺一人で対処するのも無理がありそうなんだよな」

どんどん胡散臭げになる笑顔に、暑くもないのにリタの額に汗が流れた。絶対に冷や汗だ。

「一緒に、姫さんを守ってほしいんだ」

テオドールの大きな手が、そつとリタの頬に触れた。

堅くて骨張った指先は、大切な何かを確かめるかのように、ゆっくりと動いて、リタの頬を包み込む。

「ずるいです」

怪しげな笑顔を浮かべていくせに、この手は優しく温かい。

言っていることはむちゃくちゃなのに、この人は決して答えは強制しない。

ただ、リタの返事を待っているだけだ。

「本当に、ずるい」

結局、リタは頷いてしまっただろう。

シャルを守りたいというだけではなく、彼のことを信じたいと思っ
っているから、きっと。

6・怪しい関係

「怪しい、と思いますのよ」

薄暗い書庫の中で一緒に作業をしていたシャルが、天井を睨み付けながら、ふいにそう言った。

本を年代順に並び替えていたシモーネは、その言葉に顔を上げる。

「怪しいって何が？」

「ですから。テオドルですわ。最近、妙にリタに馴れ馴れしいと思いませんか？」

テオドル、と言われて、シモーネは、シャルと共に現れた騎士の胡散臭げな顔を思い出した。

神殿内部の仕事が多いシモーネと話す機会はありませんが、たまに出会ってからかわれるので、あまりいい印象がない。

「シャルの見張りなんだよね。どんなヤツなの？」

「……強いのですわ」

「は？」

「わたくしが勝てないくらい強いのです！ それだけで、許しがたいことですのに！ 普段はあんなにへろへろしている癖にありえません！」

ぐつと握り締めたシャルの手の中で、貴重な書物が潰れている。

「わー！ シャル、何してんの！」

「あらあら、つい興奮してしまいました。……大丈夫、破損してありません」

「そ、そう。気をつけてね」

ここにある書物は、貴重なものばかりだ。

神官長のブルクハルトが持ってきたものがほとんどだが、中には神殿が出来た頃からの書物もあり、普段は温厚な神官長が丁寧に扱ってほしいとくどいほどに言っている代物だ。

もし破ったり傷つけたりしたら、説教だけではすまないだろう。

そのことはシャルにもわかっていているようで、今はもう手に力は込めていない。

「で、テオドルさんなんだけど」

先ほど、シャルはリタのことを言っていた。

確かに、シモーネにも心当たりがある。

あちこちで、彼がリタに声をかけたり、手伝いをしたりしているのを見たからだ。

「人手不足だから助かるって神官長様は言っていたみたいだけど」

ここには若い人間はリタとシモーネしかいなかった。男手はあるが、皆年寄りなため、力仕事はあまり出来ない。

シャルが加わって少しは楽になったが、やはり女性だけでは大変なのだ。

しかしである。

「考えてみれば、あの人がリタを手伝っているのはよく見るけれど、私は一度も手伝ってもらったことがない気がする」

「わたくしだって、全然手伝ってもらっていないですわ。むしろ邪魔ばかりされています」

では、彼が声をかけたり手伝いをするのは、リタだけということになる。

「怪しい」

「怪しいでしょう？」

シャルとシモーネは、顔を見合わせた。

「あの男、見た目と違っていろいろと狡賢いのですわ。リタを騙して何かに巻き込もうとしているのなら、絶対に許せません」

「単にリタが好みの異性ってことはないの？」

「どうなのでしょう。以前、あの男の弱みを握ろうといろいろ調べたのですが、女性の好みが全然わからなかったのですわ」

「そんなこと、調べてたんだ」

調べて何をしようとしていたのかは、聞かない方がいいかもしれない。たぶん、こんな辺境の神官見習いが知らなくていいような内

容のはず。

それにしても、つくづく変わっているお姫様だ。

この数日間、シモーネとリタの『貴族の令嬢』の印象が変化したのは、間違いなくシャルのせいである。

「これは、確かめるべきだと思います？」

妙にやる気なシャルが、掴みかかる勢いでシモーネに迫る。

「リタを魔の手から守るべきですわ！ それにもしかすると、テオドールの弱みを見つけられるかもしれませんもの」

結局は、そこなのか。

だが、本当に、ただリタとお付き合いしたいから頑張っているだけだったらどうするんだろう。

はりきるシャルに、少しだけ引きながら、シモーネはそんなことを思っていた。

勢いこんでやってきた裏の畑では、なんともほのぼのした空気が漂っていた。

「あれ、なんだかくすぐったいような気分になってきた」

「ほんとうですわ。背中がむずむずしてきました」

シモーネたちの前で、仲良く腰掛けて話をしている二人がいる。

リタとテオドールだ。

妙に二人の距離は近い。めずらしくちょっとだけ頬を染めたリタの、テオドールを見る目は、胡散臭い騎士を見るものではない。

対するテオドールも、大事な者でも見るような、優しい目差しをリタに向けている。

「なんででしょう、これ。嫌ですわ、少年の甘酸っぱさを感じさせる雰囲気が気持ち悪いですわ。テオつたら、もう30歳に手が届くという年なのに、なんだか純情ぶってるみたいで薄気味悪いのですわ」

「……姫さん。何勝手なこと言ってるんだよ」

とつくに二人の気配に気が付いていたのだろう。

むすつとした顔で振り返った騎士は、シャルを睨み付けた。

「だって、本当に気持ち悪いんですもの」

「シャル、正直に言いすぎだってば」

内心、シモーネだって同じ事を思っていたが、口にするのはさすがに遠慮したのだ。

「テオが女性に優しいだなんて、おかしいですわ。都では、あれだけ女性を泣かせていたくせに。だいたい、あの落とせそうで落とせない、言い寄ってくる女性は拒まないけれど、本気にはなってくれないとまで言われたテオが、そんなにでれでれとしているなんて」

「……姫さん……。なんてことを……」

「女性を泣かせていたんだ……」

リタが女の敵でも見るような視線をテオドールに向けた。

明らかにそれに狼狽えた彼は、リタに何かを一生懸命言いはじめる。

元々小柄なリタと、背が高く年相応の顔立ちをしている騎士だから、端から見ていると、いい大人が必死で少女に言い訳しているとは思えない。

しかも、さきほどよりも、二人の体は近づいているではないか。

「ところで、テオ？ いい加減リタから離れたらどうです。世間知らずの女性を手玉にとろうとしているのだったら、許しませんよ」

「わ、シャル。いきなり決めつけてどうするのよ」

「姫さん！ 誤解だ誤解！」

「そ、そうよ、シャル。私達、そんなにくっついていないってば」

いや、それは違う。どうみても二人の距離は近い。

それでくっついていないという言い訳は、かなり無理があった。

リタらしくないなあ、とシモーネは思う。

確かにリタもシモーネも、子供の頃からこの神殿に暮らしていて、若い男性と接する機会は少ない。

けれども、まったく交流がないわけでもないのだ。

シモーネは公用語が話せる関係で、中央にもよく行くし、リタだって神殿の用事であちこちに出かけている。

そこで知りあった男性のことを、お互いに話すこともよくあった。初恋の相手が誰だったかも知っているし、いい男がいたという情報交換もするし、ときめいた相手のことを噂したりもする。

まだ見習いという状態だから、積極的にはなっていないだけで、恋愛に興味がないわけではないのだ。

だが、リタは意外に男性に対して人見知りをする。ある程度親しくなるには時間も必要だし、苦手な男性には近づこうともしない。間近でそんな彼女を見ていたからこそ、どこか違和感を感じる。

「シャル、たぶんこの二人、私たちが思っているような感じとは違うと思う」

確かにほのぼのしていて、見ている気持ち悪いが、ただ仲良くしているだけとは思えない雰囲気があった。

リタが彼に接近を許しているのは、恋愛感情とかいうものだけではなく、きっと何かあったのだとシモーネは思っている。

リタが胡散臭い騎士を信用した理由が。

「ねえ、リタ。あんたたち、いったい何を話してたの？」

シモーネの言葉に、リタは、やっぱりあなたには分かるんだと、困ったように笑った。

7・騎士の告白とお姫様の想い

「……というわけだ」

観念したのか、それとも最初からばれることは想定済みだったのか、テオドールはリタに話したのと同じことをシャル達に説明した。「なるほど。それで、ですのね」

シャルが納得したように、頷いている。

彼女自身、さほど驚いていないのは、テオドールの行動を薄々感づいていたからだ。

この男は、黙って神殿のいいなりになる性格ではない。

本人は金を積まれたらなんでもやると言っているが、それだけではないのを、付き合いが長いシャルは知っている。

「屋敷に幽閉されていたときは、あれだけ命を狙われていたというのは、ここに来る道中も、神殿に来てからも、誰にも襲われないので、おかしいと思っていたのですわ。テオ、あなたがこっそり対処してくれていたのですね」

「まあな。面倒なことになるのが嫌だったしさ。あ、一応、闇討ちみたいな感じで倒しちまったから、あっちでは姫さんが振り返ちにしたって思われてるみたいだな」

彼の腕ならばそれも可能だろう。

シャルにしてみれば、最初から話してくれれば面倒ではなかったのに、と恨みがましく思うくらいである。

「振り返ちって、その人たちは、どうなったんですか？」

不安そうに自分を見るリタに、テオドールが苦笑する。先ほど彼が口にした言葉を、リタは気にしているのだろう。

「大丈夫。殺しちゃいない。多少の怪我はしているけど、生きてるよ。全員まとめて俺の雇い主に引き渡したし。あっちがあいつらをどうするかはわかんねえけど、大事な証人だ。殺すことはないと思うぜ」

「そうですか。よかったです」

ほっとしたように微笑むリタと、微笑み返すテオドール。

またおかしな雰囲気になっているとばかりに、シャルとシモーネが同時に咳払いした。

面白いくらいわかりやすく、二人の間の距離が開く。

「ええと、それでだな。そいつらの相手をしていて気づいたんだが、あちらさんは、姫さんが中央に戻ってこれない程度に痛めつけるつてのが目的みたいで、最近までは対処も楽だったんだけどさ」

「最近まで、ということは何か変わってきているんですの？」

どうやら、ここ数日、襲撃はなかったらしい。

それなのに、神殿の周りには確かに誰かがうろついている痕跡があるのだという。

今までとは違う何か目的があるのか。テオドールが、雇い主の指示を仰ごうと思っていた時、知らせが届いたのだという。

「神殿側が何かたくらんでいるらしい。それが何かは、雇い主の方で探っているようなんだが、神殿内がごたごたしているせいで、情報収集が難しいんだとさ。だから気をつけてくれて」

「神殿内の神官にも、派閥や権力争いがありますものね」

元々降着状態だった派閥争いが、神子出現によって表面化したのは、辺境にいるリタたちも聞いていた。

神子をたてて、神殿の影響力を高め積極的に政治に関わろうとする強硬派、神子とともに静かに神に祈りを捧げるべきだと主張する穏便派。両者の意見は平行線で、そのうえ、それ以外の少数派の間が多数派の方針に反対することも多くなった。

「強硬派が他の意見を押しさえ込んで、最終的には神子と王太子の結婚ってことになったんだよな」

「大神官は、前から政治に口出ししてきたり、もつと神殿に予算を回せとしつこく言ってきていましたもの。神子が現れる前に、強硬派の大神官を失脚させておけばよかった。代わりなどいくらもいるわけです」

「シ、シモーネ。なんだか、シャルが物騒なこと口にしてるんだけど」

「お姫様って。貴族のお姫様って、綺麗なドレスを着て、おほほとか笑うもんだとばかり思っていたのに、私のお姫様像が……」

事実、シモーネが中央で会った令嬢たちは皆上品だった。

リタの知っている地方領主の娘たちだって似たようなものだ。

これがお姫様の真実なのだとすれば、恐ろしいものあがる。知らない方が絶対によかった。

そんな二人の葛藤に気が付いたのか、テオドールがぽんっとリタの頭を叩いた。

「大丈夫だ。特殊なのは姫さんだけで、他の令嬢は多少の差はあっても皆ちゃんと貴族らしい」

「テオ！ とても失礼ですわ。わたくしのどこが、おかしいんですの」

「いろいろ」

年相応な少女らしく、シャルが頬を膨らます。

「信じられません」

「いいじゃないか、今みたいなの。姫さん楽しそうだし。取り澄ました顔なんかより、ずっと可愛いと思うけど」

にやにや笑いながらのテオの言葉に、シャルの顔が青ざめる。

「寒気がします……！ テオがわたくしを可愛いなど言うなんて！」

「え、でも、私もそれわかる。最初の時より、今のシャルの方が可愛いよ」

「まあ、まあまああ！ リタに言われると、とても嬉しいですね」

「私もそう思う。お姫様って話しづらいつて思ってたけど、シャルと話してると楽しいもの」

「シモーネも……！ ありがとうございます」

おまえらなあ、とテオドールが笑い、いつのまにか4人の間に流れていたのは和やかな空気だった。

「ところで、テオ。あなたの真の依頼人とは、もしかして……」

ひとしきり笑ったあと、シャルは表情を引き締めると、真剣な様子でテオドールに問いかけた。

リタもシモーネも気になっていことだったので、同じように真面目な顔で彼を見つめる。

「悪い、俺の口からは言えないんだ。ただ、王太子殿下と姫さんのことを心配している誰かだって、思っていてくれれば」

「……そうですね。依頼主のことは聞かない方がよいのかもしれませんが。それに、わたくしたちの心配をする人なんて限られていすもの」

シャルの顔に浮かんでいるのは、家族を思うような優しい表情だった。

話を聞いたときは、理不尽さに怒りさえ覚えたが、ちゃんと中央にも味方はいるのだということが、その様子でわかる。

「それに、今は心強い友人がここにいてくれますし」

シャルが、リタたちに視線を向ける。それに答えるように、リタたちも大きく頷いた。

「だから、わたくしも、正直にならねばなりませんね。まだ話していないことを、ちゃんとお伝えします」

シャルは両手を胸の前に組むと、祈りを捧げるように少し目を閉じた。

しばらくそのままだったが、やがて何かを決意したかのように、目を開き、リタたちを見つめる。

「わたくしが、国王陛下や神殿の言うとおり、大人しくこちらに引きこもることにしたのは、あの人達を油断させるためでした」

彼らは、シャルの性格をよく知っている。

黙って言うことを聞くとは思っていなかったのだろう。

父親の方も、娘がまた何かしでかすのではないか———そういう

理由から、屋敷内の部屋に監禁同然で、部屋から出るときも、必ず護衛と称する監視役が付き、身動きがとれない状態だったという。それでも、日頃から親しくしていた使用人から、王太子の様子は聞くことが出来た。あちらも同じ状況だったようで、駆け落ち騒動のあとは、ごく少数の側近以外とは殆ど合わせてもらえないらしい。「逃げる方法はないわけではありませんでしたが、また前のような失敗はしたくなかったのです」

あの時は、冷静さを欠いて、余計に状況を悪くしてしまった。自分だけならまだしも、王太子を追い詰めてしまいたくはない。それに、だ。

「引き離される直前にね、フェリクス様と約束したのです。今は無理かもしれない、でも、どんな形でも側にいるために、お互いに努力しよう」と

あの優しい人は、こんな自分を愛していると言ってくれた。

初めて会ったときは、あんなにも喧嘩ばかりしていたのに、気が付けば誰よりも近くにいて、苦しいことも辛いことも一緒に乗り越えてきた。

彼は優秀ではない。でも、努力家だ。

王として足りないところを必死で埋めようとしていた。

賢王とは言われなくても、為したことが少なくてもいいのだ。皆が穏やかに暮らせるように、やれることをやる。

そのために一生を捧げるつもりだと、シャルに打ち明けてくれた。そんな彼だからこそ、それを助ける者になろうと、シャルは思ったのだ。一生彼の傍で、彼と共に生き、年を重ねていこうと。

来年には、二人は夫婦となり、それが叶うはずだったのだ——
神子さえ現れなければ。

「わたくしたちは、どちらもまだ諦めていませんの。婚姻という形でなくてもいいから、傍にいて、一緒に生きていきたいのです。そのために戦おうと、誓いあったのですから」

「シャル……」

「みなさま、お願いします。一人では、力不足なのです。どうかわたくしを助けてください」

そう言って、シャルは深々と頭を下げた。

8・祈り

神殿内には空き部屋が多い。

そういう理由から、見習いにもかかわらず、今までリタたち3人の部屋は別々だった。

だが、皆で話しあった結果、シャルは時々部屋を変えた方がいいのではないかということになった。

なにしろ、神殿内はあちこち痛んでいて、どこからでも入り放題だ。

隠れる場所もたくさんある。

部屋を特定されれば、深夜にこっそりと忍び込んで襲うことも可能なのだ。

シャルは、もし自分が寝ている時に誰かが襲ってきたら返り討ちにするなどといったのだが、テオドールに止められた。

「今までみたいにくっそり襲撃されるんなら、姫さんだけでも大丈夫だけどさ。多人数でこられると、ちょっと無理かと。あっち側の出方もわからないし、まさか俺が姫さんの部屋で寝ずの番をするわけにもいかないだろ？」

確かに、シャルを守るのならば、一時的にでも同じ部屋にいればいい。が、それだけは絶対に嫌だと、シャル自身が反対している。

「今回のことは良い機会ではありませんか。相手が焦っているのなら、何か神殿側に不利な証拠を掴むことが出来るかもしれませんし、わたくしが罔にでもなつて襲撃者を捕まえられればと思うのですけれど」

「だめだよ、シャル。いくらなんでも危ないよ」

やりかねない勢いのシャルに、慌ててリタが口をはさむ。

剣は扱えるからとシャルは言うが、やはり1人は危険だ。

テオドールの話では、この辺りで見え隠れする侵入者は間違いない複数だと言う。しかも痕跡をほとんど残さないことから、今まで

のように後腐れのないごろつきではなく、訓練された人間が雇われている可能性が高いらしい。

下手に相手を刺激して、神殿の他の人間に危害が及ぶようなことも避けたいのだ。

「とにかく、姫さんはあんまり人気のないところには行くなよ。それから、襲われでもしたら大声出してくれ。絶対1人で暴れるな」

「暴れるとは失礼ですわよ、テオ」

暴れるシャルというのがあまりにも簡単に想像できて、こんな状況だというのに、思わずリタもシモーネも笑ってしまった。

緊張感がなさ過ぎる。

もしかすると、この二人は、いつもこうやって危機を乗り越えてきたのかもしれない。

「リタたちは、村で怪しい人影を見たとか、野営の跡があったとか、そういう噂を聞いたら、すぐに教えてくれ」

「わかりました」

「だが、もし妙なヤツを見つけても、追いかけようとか捕まえようとかは絶対するな。相手が玄人だったら、最悪殺されるかもしれないから」

もちろん、そのくらいちゃんとわかっている。

リタたちは、剣など扱えない。

出来ることは限られているのだ。それならば、出来ることをやるだけである。

「あ、そうだ。後でシャルに抜け道とか教えてあげる。神殿はややこしい造りだから、隠し通路とかも知っておくと逃げる時に便利だよ。」

「それは助かりますわ。シモーネ」

「まかせておいて」

シモーネが胸を叩いて笑ったところで、今日は一旦解散ということになった。

リタたちは、一応神官見習いだ。

しなければいけない仕事は多い。

いろいろなことがあつて時間を取られてしまったから、本日の予定はぐだぐだだ。

あまり五月蠅いことは言わない神官長も、さすがにこれでは怒るだろう。

慌てて神殿へと戻つていく3人に、テオドールの顔が綻ぶ。

ああしていると、本当に普通の少女たちだ。

シャルも、しがらみなどなければ、貴族の娘ではあつても、幸せになつただろう。同じ年の友達と今のように笑い合つていただろう。あるいは、あのまま王太子の傍にいれば。

『義姉上と兄上には、幸せになつて欲しい。例えどんな形でも』
そう言つていた依頼主の言葉を思い出す。

政治的意味合いの強い婚約だったが、二人はいつも幸せそうだった。

こちらが見ていても、心温まるような関係だったのだ。

それを取り戻してやりたい。

最初は乗り気でなかったはずの依頼なのに、そんなことを考えている自分が、何故がおかしかった。

いざというときのたぐひにと、シモーネたちから聞いた建物の構造を再確認しているうちに、テオドールはいつのまにか神殿の奥に入り込んでいた。

他の場所が傷んでいるのにくらべ、この辺りは床も壁も美しく磨かれていた。

神殿にとつて、ここは一番神聖な場所——祈りの間なのだ。

そういえば、以前入り口近くまでは来たことがあるが、扉が閉ざされていたため入ることは出来なかった。

今、その扉は開け放たれ、中がよく見える。

誰かがいるのだろうか。

そつと覗き込むと、そこには、祈りを捧げるリタがいた。彼女の近くにはきちんとまとめられた掃除の道具があるから、もしかすると先ほどまでは掃除でもしていたのかもしれない。リタは床に膝をつき、中央に置かれた像に向かって手を合わせている。だが、わずかに俯いている彼女の唇からは、言葉は聞こえない。

ただ静かに、空間の一部になったかのように、祈り続けている。その姿は、美しかった。

まるで、昔見た宗教画のようだと思う。

静かな静かな空間で、ただひたすら神に祈る。言葉もなく、聞こえてくるのは彼女と自分の息づかいだけだ。

声はかけられなかった。

話しかけてはいけないような気がした。

それほどまでに、リタが祈る姿には侵しがたい雰囲気がある。

やはり彼女は神官見習いなのだ。

ああ、できればこのままずっと祈る彼女を見ていたい。

そう思ったテオドルだったが、リタの方は彼の気配に気がついてたらしい。

「テオドルさん……？」

振り返って、扉近くでぼんやりと立っている彼の方を訝しげに見ている。

「どうかしたんですか？」

「あ、ああ。祈りの邪魔をしては悪いと、待っていたんだが……」
まさか見惚れていたとは言えなかった。

彼は誤魔化すように視線を逸らし、正面中央にある神の像を見上げる。

「これが大地神か。初めて見たな」

「はい。優しいお顔でしょう？」

穏やかに微笑む顔は慈悲深く愛情に満ちている。ふっくらと厚い唇はわずかに開き、何かを語りかけているようでもあった。

太陽神のように猛々しい姿でもなく、月の女神のようにただ美しいだけではない。

懐かしい何かを思い出させるような優しさがその像にはあった。

「随分と古い時代に作られたものなのだそうです」

言われてよく見れば、石で作られた像は、かなり古びていた。細かいヒビもある。

にもかかわらず、磨かれた表面には曇りひとつない。

この神殿にいた神官たちに大切にされてきたのだろう。

たくさん真摯な祈りも捧げられたに違いない。

もしここで祈れば、テオドールの罪も許されるのだろうか。

ふいにそんなことを思う。

少しでも——ほんの少しでもいいのだ。

「なあ。俺も祈りをささげてもいいか」

「もちろんです」

「あ、でも俺、大地神への祈りの言葉、知らないな」

太陽神の神殿には、儀式などの警護で行くこともあったから、あの程度は知っている。だが、忘れられつつある大地神への祈りの言葉はわからない。それほど変わらないだろうと思う反面、太陽神殿で捧げられるような長つたらしく美辞麗句だらけの祈りの言葉は、ここには相応しくないような気がした。

「神官長様が言っていました。昔は、今みたいな仰々しい祈りの言葉なんてなかったんだそうですよ」

ただ、無心に神に向かって祈る。

そこには純粹な願いと、神への信仰だけしかなかった。

「本当に気持ちが悪くもっていれば、言葉なんか必要ないんだって。中央の人が聞いたら怒りそうですけれど」

「そうかもしれないな」

神官長が言うことはわかるような気がした。

本当の祈りは、言葉ではないのだ。

強い思いと真摯な願い。

テオドルは、神の像の前に進み出て、膝を折る。

さきほど彼女がしていたように手を合わせ、目を閉じた。

願うのは、きっと――。

9・神官長とお姫さま

掃除のついでに、シモーネに聞いた抜け道やら裏口を確認していたら、神官長と鉢合わせた。

「おや、シャルロッテ殿。お散歩でしょうか？」

神殿内を散歩などしないと思うのだが、神官長は真面目だ。

「あ、いえ、掃除中なのですから」

「おや、そうでしたか」

シャルが持っていた箒と雑巾を見て、神官長の顔が綻んだ。

「ここは広い割には、住んでいる人間が少ないですからね。とても助かります」

「わたくしは、神官見習いですもの。このくらい、当然のことだと思います」

すまして答えたが、実は最初の頃は、自分でも恥ずかしくなるくらい、失敗ばかりしていた。掃き掃除をすれば物を倒すし、何かを拭けば勢いあまって傷をつけそうになってしまう。

慣れるまでの数日間、呆れながらもいろいろ教えてくれたリタやシモーネには感謝している。

「ここでの生活には慣れましたか？」

「はい、皆様、よくしてくださいます」

「それはよかった。なにしろ、こんな辺境ですからね。行き届かないこともあるのではと心配していたのです」

確かに、不便なことはたくさんある。

水くみも、料理も、片付けも、全部自分でしなければならぬ。

一日に1回、真剣に神に祈るということも初めての経験だった。

「それでは、シャルロッテ殿」

立ち去ろうとした神官長に、シャルは慌てて声をかけた。

「お待ち下さい。実は、ひとつだけ、気になることがあったのです。それをずっと神官長様にお聞きしたかったのですが、なかなかきつ

かけがなくて」

何度も聞こうと思っていたのだ。

ただ、なかなか二人きりになる機会が掴めず、どこまで尋ねればいいのかもわからなかった。

全てをリタたちに吐き出して、自分でも再度冷静に考えて、まだ消えていない疑問があることに気が付いたのはついさきほどのことだ。

その答えを神官長が知っているのかはわからないし、知っ
ていても教えてくれないかもしれない。

それでも、この神殿の責任者ならば、偽りのものだったとしても、なんらかの事情を聞いているかもしれないのだ。

「なんでしょうか？」

神官長は穏やかな表情を浮かべたまま、じつとシャルの次の言葉を待っている。

その様子に押されるように、シャルは口を開いた。

「何故ここなのか、ということですか」

シャルの問いかけに、神官長は首を傾げる。

「どういうことでしょうか」

「神殿側が、わたくしを何故ここに送ったのかという理由ですわ」

ああ、と小さく神官長は呟く。

柔和な顔に変化はないが、視線をまっすぐシャルに向けているところを見ると、質問に答えてくれる気があるということなのかもしれない。

やはりちゃんと聞こう。

改めて決意すると、シャルも、視線を逸らすことなく神官長を見返す。

「わたくしを王太子殿下から遠ざけたかったのならば、もっと適切な場所があっただはずなのです。実家から引き離すにしても、幽閉するにしても、ですわ。それなのに、中央から遠いとはいえ、いつでも逃げられるような場所を選び、しかもつけられた監視はたった1

人。王太子殿下と逃げようとした女を野放しにするなんて、ありませんもの。この待遇がおかしいと、普通は思っただけではありませんか？」

「おまけに、ここは大地の神を祭る神殿ですからね」

そう。ここは太陽神殿ではない。

確かに、今の大地神の神殿は、太陽神殿から見れば下の立場だが、教義や考え方は根本的に違う。全てが中央の神殿のいいなりというわけではない。監視の目が届かない場所に都合の悪い人間を押しつけるのならば、それなりの理由があるはずだ。

「神官長様も、いきなり中央から、駆け落ちしそこねた貴族の娘を押しつけられれば、困るではありませんか？」

そのこともずっと気になっていた。

金銭が絡んだり何かの便宜を図るようなことを持ちかけられたというのならわかるのだが、シャルがここへ来てからも、神殿はぼろぼろのままだし、食事情も普通程度だ。神官長が何かの贅沢をしているふうにも見えない。

「そんなことはないですよ。基本的に、ここは来る者拒めますですから」

どこまでが本気なのか、やはり神官長は表情を変えない。

何も答えてくれないのは、何も知らないからか、何か裏があるのか。

もしそうならば、警戒するべきなのは、彼なのではないか。

そうシャルが思いはじめたとき、ふいに神官長の表情が崩れた。いかにも楽しそうに笑い出すと、うんうん、などと頷いている。

「やはり、納得しませんよねえ。そう言う顔をしていると、本当にあの方に似ている」

不審顔のシャルに、神官長はますます表情を緩める。

「実は私は、まだ若い頃、中央にいたことがあるのです」

神官長は懐かしげにそう口にする。

「そこで、国王陛下—— 当時はまだ王太子でしたが、彼の家庭教

師などという恐れおおい職についていました。その縁で、あなたの御父上とも面識があるのですよ」

年齢ははつきりわからないが、白髪混じりの髪と刻まれた皺から、自分の父親よりはいくらか年上なのだろうと思っていた。

国王と父親は同じ年だ。その国王の家庭教師というならば、実際の見た目よりかなり年をとっているのだろうか？

あるいは、若くして優秀だったのか。

「神官になる前は、歴史学者だったものですから」

変わり種なのです、などと自分であっさり言う。やはり真意は読み取れない。

「私は、神官になるために職を辞しましたが、今でも陛下とは親交があります。あまり公にはされていませんが、陛下も歴史に興味がありますから」

「歴史、ですか？」

シャルは、いずれ王太子妃になるという理由から、他の貴族の令嬢よりも、国王と話をする機会は多かった。もちろん、いくらそうだとはいえ、相手はあくまで一国の王である。何が好きか、どんなものに興味があるかなどという話はもちろんしたことがない。

「国王陛下とも父とも面識があったということなのですよね。では、父から何か頼まれたのですか？ 父が、強引にことを運んだのでしょうか」

父は、シャルが可哀想だという印象を国民に植え付けようとしていた。王太子を愛していたのに、婚約を破棄されて、泣いて暮らしているのだと。だから、遠く離れた神殿で、心を休めることになったと、そういう噂を確かに広めていた。

「あなたの御父上は、愛情だけで何かをするという方ではありませんん」

「そうかもしれません」

そもそも、シャルを王太子と婚約させたのも父だった。

当時は、まだ王太子はただの側室の子供に過ぎず、国王の信任も

厚く大貴族でもある彼が何故娘を嫁がせる気になったのかと、周り
は不思議に思っていたらしい。だが、おそらくその時から、国王と
謀って、彼を王太子にするつもりだったのだろう。

彼女自身も婚約が決まった時から、あらゆることを学ばされたが、
それも将来王妃になった時のことを考えてのことだったのだと、今
になって思う。

「誤解されてはいけませんよ。それでも、子供が可愛くないわけ
でもないと思います。あなたが罪に問われないように奔走なさったの
は事実なので。まあ、変な噂がつくと、都合が悪いという理
由もあるのですが――」
「なにより、あの方は馬鹿にされるのが
大嫌いでしたからね」

「確かに、父が国王陛下に対して怒っていたのは知っていますが――」

国王を支え、国王の望み通りにフェリクスを王太子につける手伝
いをした。

それなのに、国王は神殿の意向に負け、勝手に婚約解消を突きつ
け、娘の命さえも危険にさらしている。

すべてが忠誠の結果としての行動だったわけではないが、それで
も父はこの王ならばと仕えていたのだ。幼馴染みで、幼い頃は遊び
相手として、成人してから側近として近くにいた父にしてみれば、
裏切られたような気持ちになったのかもしれない。

ただ、父は、それでも貴族で大臣だ。

そんな気持ちを抱いていることを他の貴族達に知られば、自分
が失脚させられるかもしれない。

だから婚約解消後は、いろいろ何か画策していたのを知っている。
それをぶちこわしかねない行動を取ったのはシャルだ。

まさか、娘が思いあまって王太子と駆け落ちするとは夢にも思っ
ていなかったのだろう。あの時は、考えが足りない、愚かな方法を
取っては欲しいものなど何一つ手に入らないと、生まれて初めて本
気で怒られたのだ。

結局、醜聞を怖れた神殿側が神子の耳に入る前に全てをもみ消してしまったので、世間的には無かったことにされてしまったが。

「国王陛下もね、後ろめたい気持ちがあったのだと思いますよ。太陽神殿でなく、こちらの神殿に送るよう指示したのは、国王陛下自身だったのですから」

「それは——初耳でしたわ」

「ええ。このことを話すのは、あなたが初めてですから」

「話しても、いいことなのですか？」

「あなた自身から聞かれたならば答えてもよいと、国王陛下から言われていますから」

そういえば、最後に国王に謁見した時——婚約を破棄する旨を伝えられた時も、国王の方が倒れてしまいそうなほど青い顔をしていた。その様子を見ただけでも、恐らく神殿からの圧力が強かったのだろうと推測できたのだ。

彼は彼なりに、すまないという気持ちがあったのかもしれない。

「……陛下も、フェリクス様と同様、気が弱いところがありですから」

神殿の対応については、いつも頭を痛めていた。争いにならない方法があるなら、シャルだって、国王と同じ選択をしただろう。

誰かが悪いというわけではないのだ。

だが、ただ運が悪かっただけでは、終わらせたくない。

「シャルロッテ殿。若い人は無茶をする傾向がありますが——たまには、年長者に頼るのも悪くはありませんよ」

「神官長様？」

「今のあなたは、大地神にお仕えする神官見習いです。そして、この神殿に所属している以上、あなたを守るのは神官長である私の役目。1人でなせぬことがあるのなら、ちゃんと頼りなさい」

もしかすると、神官長は、シャルがしようとしていることに気が付いているのかもしれない。

彼女の父親を知っているのならば、尚更だ。

自分は父の若い頃にそっくりだと、国王もよく言っていたのだから。

「わかっております。今、わたくしがこうして生きているのは、たくさんの人に助けられていたからだと素直に思えますもの」

最近になって、ようやくそう思えるようになってきたのだ。

だからこそ、頑張ろうと考えた。

「その時はお願いします」

そう言って頭を下げると、「必ずですよ」という優しい声がした。

大丈夫、自分は1人きりじゃない。

こんなにも優しい人たちが周りにいる。

潤んでくる目に気付かれないように、そっと瞬きをすると、シャルはもう一度頭を下げ、その場を後にした。

10・神官見習いと不審な人たち

最近、見たことがないヤツに会った。

そういう話を村の青年に聞いたのは、偶然だった。

「それが変なヤツでさ。神殿に最近騎士がこなかったか、とかさ。どんな男かとかさ。そういうことを尋ねるんだよ」

そう言って、彼はしきりに首を傾げていた。

騎士、とはテオドールのことだろう。シャルやリタたちと一緒に、なんどか村へ買い出しに行ってきたから、当然青年もテオドールのことは知っている。

テオドールに教えないと。

そう思っで、自然と足取りが速くなる。

だから、気が付くのが遅れた。

いや、もしかすると、気が付いていたとしても、無駄だったのかもしれないが。

ふつと足下に影が差した——そう思っで立ち止まった瞬間だった。

何かが首筋に当たったような感触があった。

鈍い衝撃に、よろめく。

あわてて体勢を立て直そうとしたのに、手の先も足の先も痺れたような感覚があつて力が抜けていく。

だが、床に膝をつく前に、両腕を取られ体は中途半端な状態で止まった。

誰かが転がらないように支えたとかわかったが、不思議なことに目の前が霞んでいて、よく見えない。

何が起こっているの？

混乱しながらも、辺りを確かめようと体を動かすと、声が聞こえ

た。

誰かが目の前に立っている。

「おい、この女であっているのか？」

何か堅いものが頤を捕らえ、上を向かされた。

朦朧とする意識の中、見えるのは黒い影だけだ。ゆらゆらと動くそれは、リタの目の前で、近づいたり遠くなったりしている。

「……間違いない。あの女と親しく話しているのを見た」

「しかし、大丈夫なのか？ この女、テオドル殿とも親しいと言っていないかったか」

テオドル、という言葉に、リタの体がびくりと動く。

何故、彼の名前が出てくるのだろう。

この人たちは誰なのか。

「だからだよ、この女を選んだのは。あの男は信用できない。邪魔されても困るからな」

黒い影から、嫌な笑い声が聞こえる。

この影——恐らく男なのだろうが、彼は、テオドルのことを嫌っているのだろうか。

名前を口にした時も、あの男と言った時も、その声には嫌悪感が宿っていた気がする。

「お嬢さん、悪く思わないでくれよ。攫うのは、あんたでも、もう1人のお嬢さんでもよかったんだ。ただ、あんたは運が悪かった。シャルロット嬢だけでなく、テオドルと関わっちまったんだから」

影から伸びてきた黒い塊が、リタの髪に触れ、まるで幼子にするかのように、ゆっくりと彼女の髪を梳く。

「本当に驚いたよ。あの男は、あんたの前だと良い顔をする。大事に思っているんだろうな。そう思うと、見てみたくなるんだよ。あの男——テオドルが苦しむ顔つてのいうのをさ」

やめて、と言いたいのに、口がうまく動かない。

それどころか、段々意識が朦朧としてくる。

「さてと。シャルロット嬢を招待しなければな。きっと喜んであ

たを迎えに来てくれるだろう」

だめだ。

自分のせいでシャルやテオドルが危険な目に会うのは嫌だ。

そう思うのに、意識はどんどん曖昧になっていく。

「それまで、おやすみ。お嬢さん。大丈夫、殺したりはしないよ。だって、あんたを殺しても、報酬はもらえないしさ」

意識がなくなる直前に聞こえたのは、物騒な言葉だったにもかかわらず、ひどく優しい声音だった。

次に気が付いたときは、辺りは真っ暗だった。

体から痺れは消えているが、動けない。

どうやら、手足を縛られた状態で床に転がされているようだ。

口を塞がれていないのが救いだ、だからといって、状況がよくなるわけではない。

捕まってしまったんだ。

そう思うと体が震えてくる。まさかこんなことになるとは思わなかった。

シャルを助けるどころか、迷惑をかけてしまう。

どう考えても、シャルを呼び出すために、利用されるのだろう。

殺されていないだけましなのだろうか？

怖い。

これからどうなるのか、どうされるのか。

いつまでここにいろのか。

みんなも心配しているだろう。逃げられないかと、縛られた手首に力を込めてみたが、びくりとも動かない。足の方も同じだった。

どうしよう。

きつと皆心配している。

シモーネもシャルも、きつと。

どうにかして、ここにいろことを教えられないだろうかとも思う

けれど、ようやく暗闇に慣れてきた目にも、この部屋の特徴を捉えることはできなかった。

唐突に光が当たりを照らした。

まぶしさに細めた目は、すぐに光に慣れる。

どうやら、ここは小さな倉庫のような部屋で、誰かが扉を開けたために、光が差し込んできたらしい。

扉の向こうには誰かがいて、リタの様子を窺っているようだった。しばらくそのまま立っていたが、彼女が意識を取り戻していることに気が付くと、中に入ってくる。

薄ぼんやりとした光の中、その人物が全身黒ずくめなのが異様だった。顔も覆っているので男だということしかわからない。

「ああ、目が覚めたみたいだな」

布越しのくぐもった声だが、聞き覚えはあった。

あの時、自分を襲った男の1人だ。

男は、リタの傍に膝をつくと、彼女の顔を覗き込む。

「誰、ですか？」

問いかけると、ただ笑い声だけが返ってきた。

答える気がないのかもしれない。

「どうして、私を襲ったんですか？ 人質のつもりなんですか」

「んー。テオドールが、あんたを気に掛けるから」

「え……」

「俺、あいつが大嫌いなんだよ。昔、殺されかけてさ、この国追い出されてさ。散々な目にあった。だから、復讐したくて、この依頼を受けたんだよね」

「て、テオドールさんが、意味もなく人を殺そうとするなんて、そんなの信じられません！」

「だって、あいつ騎士じゃないか。騎士って何か知ってる？ 剣を何のために持っているか、わかってるんでしょ？ 命令されれば、

殺すのをためらっちゃだめなんだよ?」

返事が出来なかった。

そつだ、騎士の称号は飾りじゃない。

剣だつて、ただの装飾品じゃない。

でも、彼は騎士になったのは、食いつぱぐれないためだと言っていた。神殿にいれば人を殺さなくていいと、本気で言っていた。

あれは嘘じゃない。

「例えそれが理不尽な命令だったとしても、やらなくちゃいけないことつて、いっぱいあるんだよ。俺も騎士だったからさ、よくわかる」

「あなたが、騎士……?」

「そつ。命令無視して、たくさん殺しちゃったからさ、剥奪されたけどね」

唯一見えていた目が細められ、押さえたような笑い声が布越しに漏れる。

ただそれだけのことなのに、背中に嫌な汗が流れた。

この人は、変だ。

そんなことを、こんなふうにしそうに口にして、笑うなんて。

「俺のこと、怖い? ものすごく震えてるよね」

男の手が伸びてきて、リタの髪に触れる。そのまま、髪に指をかませ、掬いとった。

「綺麗な髪、だよ。俺、あんたみたいな人間大嫌いだけどさ。こういうふうに、さらさらした髪の毛は、好き」

そついえば、捕まった時も、朦朧とした意識の中、誰かが自分の髪を執拗に触っていた。

あれは、この男だったのだろうか。

「知ってた? あいつも——テオドルも、こうやって髪に触れるのが好きなんだ。俺を殺そうとしたヤツが、俺と同じこと好きだなんて、ものすごく気持ち悪いよね」

不愉快そつに言う言葉とは違い、リタの髪に触れる指先は、まる

で壊れ物を扱っているかのように丁寧だ。

「あんたさあ、もう、あいつに触れられたの？ 髪だけじゃなくて、いろいろ」

いろいろと言った時の、探るような目差しに、リタは慌てて首を振る。

「そ、そんなこと、どうしてテオドールさんがするんですか。あの人は、シャルの護衛なんですよ」

「本当に？ 本当に何もされていないの？」

頬に触れられたことはあったが、あれは話の流れで自然にそうだっただけだ。

特に何か理由があったわけではない。そのはずだ。

「なんだ、つまらない。もし、そうだったら、もっと遊べたのに。」

——ああ、でもあいつらしくなく、何もしないっていうのは、それはそれで意味があるのかな」

考え込むように首を傾げるが、男の目からは、何を思っているのかは読み取れない。

「招待したのはシャルロッテ嬢だけだけど、きっとあいつも来るからさ。そうしたら、わかるかもね。その時、怯えて泣いてくれると嬉しいなあ」

男の言葉に、リタは唇を噛みしめる。

絶対に怯えたりするものか。

怖いけれど、でも、負けるものか。

嬉しげに、何度もリタの髪に触れる男から目を逸らし、そう思った。

11・騎士の焦り

「ちょっと待つてよ、テオドールさん！」

シャルが動くより早く、扉近くにいたシモーネがテオドールの上着を両手で掴んだ。

勢いがついていた彼がつんのめって転ぶのを見てごめんなさいと謝るが、手は離さない。

「よくやりましたわ、シモーネ」

かけよつてきたシャルが、倒れたテオドールを見下ろしながら溜息をつく。

「少し頭を冷やしなさい、テオドール」

「姫さん……」

「1人で突つ走つても、どうにもならないでしょう。いつもの冷静なあなたはどこへ行ったのです？」

「そうよ。ここで焦つてたつて、リタが戻ってくるわけじゃないのよ」

そんなことはわかっている。

だが、窓を派手な音とともに割つて投げ込まれた手紙を見たとなん、頭に血が上ってしまったのだ。

自分の認識が甘かったのだと思う。

例え、辺境とはいえ、リタは神殿に所属する神官見習いである。

太陽神を祀っているわけではないが、それでも、ここはその下部組織という扱いだ。もしその人間が不審な死に方をしたり危害を加えたりされた場合——それが、王太子の元婚約者が身を寄せている場所ならば、何かがあつたのではと考える者も出てくるだろう。

今、シャルを排除しようとしている者たち——強硬派は神殿内部での最大勢力ではあるが、全ての神官を掌握しているわけではない。彼らを今いる地位から引きずりおろして、自らが頂点に立とうとしているものも多にいる。仮に事件をもみ消そうとしても、どこ

かで綻びは出るだろう。そこから、シャルを襲ったのが神殿側とわかれば、内部が荒れるだけでは済まない。失脚するものもいるかもしれないし、表面上は穏便に終わったとしても、確執は残る。

神殿の最近のありようを危惧する貴族たちも多いから、些細なことからこのことが漏れて貴族にいらぬやつかい事を持ちかけられるのも、避けたいだろう。

だからこそ、今までは人目につかぬように神殿側も行動していたのだ。

やり方が変わったのか、それとも雇われた相手の独断なのか。

「どんな状況であれ、生きているという相手の言葉を信じるしかないのですわ」

「わかってる、そんなことは」

だが、わかっていても気ばかり焦るのだ。

今までこんなことはなかった。どんな相手が人質に取られたとしても、冷静に対処できていたはずなのに。

「今のあなたでは、助けられるものも、助けられなくなるでしょう？ 感情だけで突っ走って大失敗してしまったわたくしが言うのだから、間違いないですわ」

「だいたい、ちょっと焦りすぎだよ。何か気になることがあるの？」

シモーネの言葉に、わかりやすいほどにテオドルが動揺した。

シャルが、その行動に目を細める。

「やはり、何かありますのね。手紙を読んでからのテオは、あきらかにおかしいですもの」

ひらひらと、シャルは手にした手紙を振る。

手紙には、それほどたくさんのはきはき書かれていなかった。

神殿の女性を預かっていること、指定の場所にシャル1人でくること。要求通りにするならば、預かっている女性に危害を加えるつもりはないということ。

それから、黒い髪が数本、挟み込まれていた。今この辺りにいる者で、長い黒髪なのはリタしかないから、彼女のもので間違いは

ないだろう。

「……手紙のこの部分に、走り書きのようなものがあるだろ？」

シャルもシモーネも、テオドルが指し示した部分は、最初から気になっていた。きっちりと並んだ文字の中、そこだけわざと崩したかのように書かれており、文章そのものも、まるで親しいものへの問いかけるかのようなものだったのだ。

「『ところで、君が好きそうな手触りの綺麗な髪だね。もう触れてみたの？ 俺は気に入ったよ』なんて、シャル宛にしてはおかしいなーって思っただよね」

シモーネも、不思議そうに首を傾げている。

「わたくしもですね。他人の髪に触って喜ぶなんてことはありませんから」

「だよな」

そこで、シャルとシモーネの視線がテオドルへ向けられる。

「怖い顔するなって。なんとなく、その部分は、俺宛かもしれないと思っただけだからさ」

「ええ、そうなの？ ……ていうか、テオドルさんって、髪の毛触るのが好きとか？」

「いや、好きとか、そういうのではなくて、ええとだな」

しどろもどろになるテオドルに、シモーネは呆れたような顔をする。

「なんだよ、そのおかしなものを見るような目は」

「だってさー。そりゃ確かにリタの髪は綺麗だけどさ。そうなのかい。テオドルさんを落とすのに必要なのは、綺麗な髪の毛なんだ。うん、リタを無事に助けだしたら、教えてあげようつと」

「ぶっ！」

「汚いですわ、テオ」

むせたテオドルが咳き込む姿を、シモーネが冷たく見やる。

「そんなことで動揺するなんて、修行が足りませんわ」

「修行は関係ないだろ」

力なく言って溜息をついた後、テオドールは何度か頭を振る。

「けど、姫さんたちのおかげで、少し落ち着いた。馬鹿話してみるのも効果あるもんだな」

「馬鹿話……まあ、いいけど。冷静になったんなら、よかった」

シモーネはどこか不服そうでもあったが、それでもすすきりした顔をしているテオドールを見て、安堵の息を吐いた。

リタが心配なのは、シモーネも一緒だ。ただ、それほど賢くもないし、腕力もない彼女にとって、テオドールは頼るべき大人でもある。彼が取り乱しては、つられてこちらまで落ち着かなくなってしまう気がするのだ。

「問題なのは、何故わざわざそれを書いたかってことだろ。俺が姫さんについてきてるのは隠してなかったから、知っているヤツは結構いるけどさ。殆どの人間は、俺は神殿側だって思っている。この場合だって、手紙が姫さんをおびき出すためだとすれば、何故そんな一文を混ぜる必要がある？」

「テオが神殿を騙しているってのがばれたとか？」

一番に考えられるのは、それだ。監視といっても、これだけならだらと過ごしているのだから、もし様子を見に来た者がいたら、仕事をさぼっていると取られてもおかしくない。

「それにしては、妙な文章だろ」

「確かに。髪の毛云々なんて個人的なこと、書く意味ないよね」

あの一文以外は、全て事務的な言い回しだった。そこに、感情は込められていない。ただ、事実と要求だけが書き連ねてあったのだから。

「テオのことを知っている人間で、こういうことを書きそうな人に心当たりは？」

彼の嗜好に関しては、シャルもいろいろと調べたのに、ほとんど掴めなかった。それなのに、それを知っているということは、テオと面識があり、なおかつ近い場所にいた人間ということになる。

そうなると、考えられるのは、彼が所属している騎士団が考えら

れるのだが、テオドールの返事は煮え切らない。

「あるような、ないような。ただ、そいつが神殿側に着く理由がわからない」

「あら、何故ですか？」

「……もし、俺が思う相手なら、そいつは神殿のことを恨んでいるだろうからな」

神殿に喧嘩を売ることとはあっても、手を貸すというのは考えにくいと言う。

「ただ、俺に対する恨みもあるから、そっちの感情の方が強いんだとすると——わからない。それに、あいつがこの国にいるはずがないんだが」

確証が持てないから、本当は黙っていたかったことだ。

「ここで、相手が誰だか話していても、時間ばかり過ぎていくんじゃないかな」

考え込んでいるシャルたちに、シモーネが遠慮がちに言う。

相手のことも重要なかもしれないが、シモーネにとっては、リタの無事がなによりも心配なのだ。

「ねえ。私、この辺の地理は詳しいよ。指定された小屋のことも知ってる。それが何か役に立たない？」

シモーネもリタも、ここからさほど遠くない村の出身だ。幼い頃、神殿に来る度に、二人でこの辺りは遊び回っていたし、神殿に身を寄せてからも、暇な時は探検と称して、山の中をうろついていた。獣道も、何処に何が生えて、どこが危ないのかも、全部知っている。それでしたら、作戦を考えましょう。このまま、わたくしが1人でいっても、テオが無謀にも突っ込んで、ろくな事にならないのはわかりきっていますわよね？」

「ああ。相手が幾人いるかもわからないしな」

「時間はあまりありませんわ。なるべく万全な準備をして行きましょう」

指定された時間まではそれほどない。応援を頼む間もないだろう。

「それと、ひとつ気になるんだけど。リタがいなくなったこと、神官長様にどう伝えるの？ まさか黙っておくわけにもいかないよね」
心配そうなシモーネに対して、シャルの方は余裕ある様子を見せる。

「それは、正直に話しても大丈夫だと思います。なにもかも、ばれてしまっているようですし」

「ばれているって、何が？」

「一連のいろいろですわ。わたくしの事情も、おそらくテオが誰に雇われているのかも」

かいつまんで、神官長と会ったときの話をすると、テオドールが大げさに溜息をついた。

「まじかよ、食えない神官長だと思っていただけさ」

常に笑顔で穏やかな様子ながら、どこか掴みきれない神官長の顔が頭をよぎる。

ここがこれほどまでに穏やかで、中央の派閥争いや喧騒とは無関係なもの、辺境だからだという理由だけではないのかもしれない。

「これで納得した。国王陛下が絡んでいたから、護衛が俺一人って話が普通に通ったわけだ。……もう一人くらい仲間を引きこんどくべきだったって気がするが」

そのことで、いまさら悔やんでも仕方ない。

その時はそれが最善だと思ったのだ。秘密を知っている人間は少なければ少ないほど、漏れる確立も減る。

「大丈夫、テオドールさん。リタはきつと無事。大地の神が守ってくれる。だから、作戦、頑張って考えようよ」

シモーネが、彼の服の裾をぎゅっと握ると、力強く言う。

その言葉が真実になるように、今は行動するしかないのだろう。

12・約束の刻限

好き勝手に話したいことだけ話したあと、飽きたように出て行った男は、それからしばらくすると、また1人でリタのいる部屋に戻ってきた。

驚いたのは、男がリタの目の前で、覆っていた布をはずし、素顔を晒したことだ。

色素の薄い茶の髪と平凡な顔立ちは、想像したよりも若く、20歳を少しすぎたくらいにしか見えない。もう少し年上かと思っていたから、そのことに驚くとともに、嫌な予感もする。

まったく顔を見せなかった男が、何故急に布を取ったのか。

見られても気にしないことにした、というわけではないだろう。

ならば、最初から顔を隠しておくはずがない。万が一、リタに逃げられたとしても、顔を知られていなければ、言い逃れも出来る。

最初から、生かして返すつもりはないということだろうか？

危害を加えないと言ったことも、それはシャルたちが来るまでの話で、もしかすると、現れた後は用なしだと、殺されてしまうかもしれない。

思いつくことは、最悪のことばかりで、体が震えてくる。

「あれ？ やだな、何怖い顔してるのさ」

リタが怯えている理由などわかつているだろうに、男は楽しそうに笑いながら、近づいてきた。

「あのさー、悪いんだけど。もうすぐ約束の時間なんだよ」

男はしゃがみ込み、転がっていたリタの体を乱暴に起こした。

「シャルロッテ嬢が来たときに騒がれると困るって、他の連中がうるさいからさ」

男はそう言いながら、リタの口を無理矢理こじ開けると、その中に布を突っ込んだ。

「う……ん……！」

吐き出す前に、顔半分を覆うように布をきつく巻かれ、まったく口がきけなくなってしまう。

気持ち悪いのと苦しいのとで、むせて前屈みになったところを、ひよいと担ぎ上げられた。

「まあ、人質になったのが運の尽きって、あきらめて。あと、移動するから、暴れないでほしいな」

大人しくする理由など、もちろんリタにはない。

動かせる部分をすべて使って体をよじって逃れようとするが、男は細身にもかかわらず、力が強かった。どれだけ暴れても、足取りはしっかりとしているし、掴んだ腕も動かない。

「無駄なのになあ。それに、もう着いちやったし」

男の言葉とともに、リタは地面におろされた。

冷たい床の感触と、まわりに感じる男以外の視線に、様子を確認しようと顔を上げる。

さきほまでいた場所よりは広いが、家具1つない殺風景な部屋の中、黒い服に身を包んだ男たちがリタを見下ろしていた。

彼らは、茶の髪の子と違って、素顔は晒してはいない。

「う……？」

見える範囲にだけでも、4人はいる。真後ろにも気配がするから、茶の髪の子を合わせても、この場には5人以上いるのだ。

顔を隠しているせいで、表情はまったくわからないが、リタを見る目に感情はない。

「……まだ、生かしておくのか？」

そのうちの1人が、面倒そうに言うと、残りの男たちも頷く。

「まあ、万が一の時のためにね。こっちが不利になったとき、死体にでもしておいて使えないってことになる、人質の意味ないですよ」

「相手は、女1人だぞ」

「テオドルもいるかもしれない」

「でも、2人だ」

その言葉に、茶の髪の男は、大きく溜息をついた。

「あのねー、言っておくけれど、シャルロット嬢もテオドルも強いよ」

「かつて負けたからこそその負け惜しみではないのか？」

「負けたからこそ、テオドルの実力はわかってるの。過信は身を滅ぼすよ」

俺みたいに、という自嘲めいた言葉は、傍にいたリタにしか聞こえなかった。それを言ったときの彼の目が、憎しみに満ちていたことも、リタしか気が付かなかっただろう。

「まあ、どちらにしても、貴殿は録に剣も使えん。そこで大人しく人質が逃げないように見張っておけばよろう」

どう見ても逃げられない状況のリタを見てそう言う男に、悪意を感じて、リタは茶の髪の男とその男を見比べた。

仲間だと思っていたが、彼らの間には、何か隔たりのようなものがある。ただ単に契約上の立場の違いなのか、それとも他の理由があるのか。

今のリタには判断のしようがない。

「わかってるよ。あんたたちの邪魔はしない。それより、時間も近づいてきているし、そろそろ配置についたら？」

男がそう言うのと、その場にいた者全員が、武器を手に取り、外へと移動し始める。

「俺に遠慮なんかしなくてもいいよ。どんな手を使ってもいい。雇い主は、ここに辿り着くまでにシャルロット嬢を殺した人間に、特別報酬をくれるそうだから」

一部の振り返った男が、どこか忌々しそうに茶の髪の男を睨むが、結局それ以上何も言わず、無言のまま外へと出ていった。

男達が全ていなくなってしまうと、茶の髪の男はリタの方へと向き直った。

そのまま、リタの隣に腰を下ろすと、手を伸ばしてまた髪に触れる。

「ねえ、お嬢さん。テオドルは来るかな。来ると思う?」

男は、上機嫌だ——気味が悪いほどに。

「俺は、絶対来ると思うんだ。あんたもそう思うだろ?」

リタが返事が出来ないと思っっているくせに、質問を投げかけてくる男の真意がわからない。

返事が欲しいというよりも、聞かれたことにいちいち反応する彼女を面白がっているのかもしれない。

「どんな顔をしているか気になるね。怒っていると思う? 案外冷静だったりして」

リタは、テオドルのどちらの姿も見たことはない。

思い出すのは、面倒そうにしているところとか、困ったように笑うところとか、何かたくらんでいそうな笑顔とか、爽やかな好青年風な態度だけ。

一度だけ、真摯に祈る横顔を見る機会があったけれど、あれほどちらかというと、穏やかで満たされたようなものだった。

「あいつってさあ、戦っている時って、ほんと無表情なんだよ。すげー怖い。あんな顔で迫られたら、助からないって思うんじゃないかな。実際、俺もそうだったし」

過去を思い出すように細められた目は、さきほど見たのと同じように、憎しみに満ちている。

「お嬢さんには、見せない顔? 見たことないよね、たぶんさ。というより、お嬢さんって、人に剣を向けられたことなんてないでしょ」

男の、髪に触れていない方の手が、いつのまにか短剣を握っていた。

鈍い光を放つ切っ先が、まっすぐに彼女の胸に向けられている。

「……んん!」

目を見開いて震えるリタの反応に満足そうに笑うと、男はちょん

ちゃん、と剣の先で彼女の胸をつついた。体を傷つけるほどの強さはないが、リタの顔は真っ青だ。

「うー……」

思わず竦めた体に、男はさらに短剣を近づける。

「あんまり動かないでよ。俺、元々利き腕は右だから、こっちであまりうまく短剣が扱えないんだよね」

そんなことを口に行っているくせに、男の手には迷いもぶれもなく、動きは正確だ。

それから、しばらく男はリタの反応を楽しむように短剣を弄っていたが、ふいに動きを止める。

「外、騒がしくなってきたよね。ここまで来ずにケリがついたら楽なんだろうけど、それじゃ面白くないからなあ」

さきほどまでは男の声しか聞こえなかった部屋の中にまで、外の喧騒が聞こえてくることにリタも気が付く。

シャルたちが来ているのだろうか？ 戦っているのだとすれば、無事なのだろうか。

外の様子を確かめたくても、リタには何も出来ない。

「さてと、お嬢さん。テオドールが無事ここまでたどり着けるように、祈っててよ。見習いとはいえ、神に仕えているんだからさ。俺が祈るよりも、お願い叶いそうじゃない？」

すくい取ったリタの髪の毛に口づけると、男は外へと繋がる唯一の扉へと、視線を動かした。

13・人質と騎士とお姫さま

飛び込んだ小屋の中で、テオドルが見たのは、リタと見覚えのある男だった。

「……リヒャルト」

彼でなければいいと、心のどこかでずっと考えていたのに、それはどうやら甘い願いだっただよう。

「久しぶり、テオドル。ここまで来れたってことは、外にいた奴らはやられちゃったんだな。やっぱり強いなあ、お前は」

「何故お前がここにいる」

その質問には答えずに、リヒャルトは大げさな溜息をつく。

「俺が招待したのはシャルロット嬢だけだったはずだけど」

「あら、ちゃんと招待されてやってまいりましたわよ」

テオドルの後ろから、シャルが現れる。

神官見習いの服のままだが、剣を手にかけていた。

「テオ、久しぶりなどと言っていました、この人、やはりあなたの知り合いですか？ 交遊関係が広いとは思っていましたが、こんなことをする相手とはお友達にならない方がいいと思いますわよ」にこにここと、場違いなほど明るい笑顔だが、目は笑っていない。

「知り合いつただけで、友達でもなんでもないぞ。それに、姫さん、あんたも見覚えあるんじゃないか？ こいつは元神殿騎士のリヒャルトだ」

シャルは目を細めて、リタの隣にいる男の姿を無遠慮に眺めはじめ。

やがて思い当たった一つの呼び名に、シャルの眉間に皺がよった。

「……狂戦士」

直接会ったことはないが、悪い意味で、彼女の印象に残っている男だ。神殿を守ることがその主な任務でありながら、不必要な場面で敵を傷つけることも多かったと聞く。

3年前、国境近くで神殿絡みの小競り合いが起きたとき、派遣された部隊の中に彼はいたのだが、その際、上司の命令を無視し、敵味方なく殺してしまったのだと、王宮に上がってきた報告にはあった。

「国外に追放されたはずでは？」

それまでに幾つかあった功績と、神殿側の公にしない様々な事情が絡み、確か騎士位を剥奪され、国外追放にされたはずである。「戻ってきたんだよ、とある人に頼まれてね。それに、テオドールにも会いたかったし」

会いたいという言葉の割には、剣呑な目差しをテオドールに向けている。

「なんだか、恨まれているみたいなんですけれど、テオが何かしましたの？」

「3年前、暴れ回るこいつを大人しくさせるために、利き腕を切ったのは俺なんだ」

あの時のことは、あまり思い出したくない。確かに彼を止めたのはテオドールだったが、彼自身も瀕死の重傷をおって、生死の境をさまよったのだ。

「おかげで、いろいろ不便だったよ。動くようにはなったけれど、剣がうまく扱えない。左手も使えるけどさ、いろいろ不便で困っちゃうよ」

その割には、左手に持つ剣を器用にくるくと回している。彼が言う言葉が本当のことなのか、それともわざとそういう風に見せているのかは、それだけではわからない。

「こっちはさ、約束通り、お嬢さんには、まだ何もしていない。一応、俺も元神殿騎士だからね。必要がなければ、神官様を傷つけたりはしないよ」

言い換えれば、必要があれば、殺すことも傷つけることも厭わないということなのだろう。

「さあてと。武器を捨ててもらおうかな」

楽しそうに言いながら、リヒャルトは手を伸ばし、リタの髪に触れる。見せつけるように何度も髪を弄んでいる様子に、テオドールは不気味なほどに無表情だった。

リタの方は、リヒャルトの手が髪に触れる度、辛そうに体を強張らせる。時々苦しそうに身をよじるのは、口を塞がれて息苦しいだけではない。

張り詰めたような空気と、殺気だったテオドールたちの雰囲気飲まれていくせいだ。

「剣、捨てないの？」

問いかけながら、滑り降りた指先が、リタの首筋に触れた。視線はテオドールに向けたまま、嫌な笑い声が漏れる。

「なあ、お嬢さん。ちよつと痛い目にあってみる？」

わずかに、リタの体が反応する。一瞬怯えたような表情が浮かんだが、すぐに消えた。代わりに、リヒャルトを睨み付ける。

「あの二人が、なかなか言うことを聞いてくれないからしょうがないよね。どこがいいかなあ。どこがいいと思う？ 目？ 胸？ それともその柔らかさそうな頬かな」

「お待ちなさい！」

凜とした声で、言葉を遮ったのはシャルだった。

剣を持たない方の手で、今にも飛び出しそうなテオドールを押さええている。

「あなたの目的を聞いていませんわ。私を殺せば、あなたに利益があるのですか？」

「まあね、報酬が破格ってだけじゃなく、俺の剥奪された位も返してくれるそうだよ」

あまり興味はないけれど、と笑う。

「でも、一番の報酬は、好きにしていって言われたからかな」

「何を？」

「テオドール。くれるって行ったよ。殺しても、痛めつけても、何してもいいって。そのことで罪には問わないでくれるそうさ。だから

ら、依頼を引き受けたんだよ。まあ、本当のところ、どこまで約束を守ってくれるかはわからないけどさ」

ただ、国内に入れるということは、リヒャルトにとっては魅力的だった。

今の彼は、裏ルートを使ったとしても、なかなか国内をうろつけない。彼自身を恨んでいる人間は、この国にはたくさんいるのだから。

「引き受けたのは、復讐が目的か？」

「そう」

「だったら、姫さんとはかく、リタは関係ないだろう」

子供っぽく拗ねたように顔を歪めて、リヒャルトは不服そうな様子を見せる。

「そうかな？　だって、彼女に興味あるんだろう？　そんなふうに感情を露わにするくらいなんだろう？　だったら、俺にとっては関係があるってことになるんだよ」

リヒャルトの左手に握られた短剣が、リタの胸元に滑り落ちる。

短剣が通った部分——わずかばかり上着から見えていた肌に、赤い線が刻まれる。

「どう？　切れ味いい短剣でしょ？　次はどこにしようかな」

にやにや笑いながら、短剣を弄ぶりヒャルトの目は、本気だ。

これ以上抵抗すれば、更に深くリタを傷つけるかもしれない。

糞、と吐き捨てるように言つと、テオドールは持っていた武器を放り投げた。

「シャルロット嬢、あんたもだ」

ちらりとテオドールの顔を眺めたあと彼女も持っていた武器を投げる。

「ほんと、素直だねえ。……そうだ。いいことを思いついた」

上機嫌な笑いを浮かべると、リヒャルトは短剣をリタの首筋に当てた。

「テオドール、あんたがシャルロット嬢を殺してよ」

リタの大きく見開かれた目が、テオドールを見た。

「そうしたら、お嬢さんくらいは助けてあげてもいいかな」
だめです、とリタの目が必死に訴えている。

私なんかのために、そんなことをしないで。そう言っているのがわかる。

時間切れなのか。

苦い思いのまま、シャルを見ると、何かを覚悟したような静かな目をした彼女が自分を見ていた。

「わたくしは、簡単に殺されませんよ」

「そうだな」

「しぶとく粘りますから、あなたも……粘ってください」

最後の部分だけ、テオドールにしか聞こえないほど、小さな声だった。

それだけで十分だった。

その先は何をすべきか分かっている。

時間稼ぎはまだ続けられる。

テオドールが、ゆっくりとシャルに向かって手をのばした。
その時である。

小屋の中に、一陣の風が吹いた。

14・救出

ぐえ、という呻き声とともにリヒヤルトが頭を押さえて蹲った。何かが上から降ってきて、それが彼を潰したのだ。

「……！」

リヒヤルトが急に手を離れたものだから、そのままの勢いで同じように床に尻もちをついたリタは、落ちてきた人物に、目を丸くする。

降ってきたのは、シモーネだったのだ。

「あ、やりすぎちゃった」

てへ、というふうに可愛らしく首を傾げたシモーネは両手に大きな壺を抱えている。

どうやら、シモーネは落ちたと同時に、持っていた壺でリヒヤルトの頭を叩いたらしい。

「残念だったねー。この辺りの森も山小屋も、私とリタにとっては庭みたいなものなんだよ。どこに隙間があつて、どこから入れるかなんて、全部知ってるんだから……」って、聞いてないし」

リヒヤルトはうめき声を一度上げたきり、ぴくりとも動かない。

「え、まさか死んでないよね？」

慌ててしまったのは、自分が少しやりすぎたのかと思ったからだ。

彼女の役目は、本当はシャルとテオドルが大暴れしている間にリタを助けだすというものだった。

誰かがリタの見張りをしているという可能性も考えていたから、見つからないように小屋の天井裏から忍び込んだ。

まさかこんな危なそうな男がいて、シャルたちと対峙しているとは考えていなかったから、人の話し声がする場所から下を覗いた時は驚いた。

事態は切迫しているようだし、危ないとは思ったけれど、天井裏

に置いてあつた壺を手に、思い切つてシモーネは男の上に飛び降りることにしたのである。男が隙を見せれば、後はシャルとテオドルがなんとかしてくれると考えたのだが、ここまでうまく行くとは思わなかつた。

男の注意がシャルたちに向いていたのも幸いしたのかもしれない。結果的に、勢いがつきすぎてこういう状況になつたのだが、もし相手が死んでしまったなんてことになったら、何か罪に問われるのだろうか。

そう思うと、顔も真つ青になる。

「大丈夫です。気を失っているだけのようですわ」

すばやくよつてきたシャルが、男の様子を確かめ、そう断言した。安心させるように、シモーネに向かつて微笑みかける。

「まあ、少々怪我したところで、自業自得ですもの。シモーネが気に病むことはありません。女1人降つてきたくらいで、あつさり死んでしまうほど、柔ではないですわ」

「え……。なんだかちよつと違う気がするけれど。生きているなら、本当によかつた」

いくらリタを誘拐した悪い人だつたとしても、命を取る権利はシモーネにはない。

「でも、間に合つてよかつたですわ。いくら私たちが注意をひいていたとはいえ、いつこの男があなたのいることに気が付くかと気が気でなかつたですもの」

そう言いながらも、シャルは靴の踵でぐいぐいと男のお腹を踏んでいる。

痛そうだと思いつつ、あまりにもシャルが笑顔が恐かつたので、シモーネは止めるのはやめておいた。

男のことは、シャルに任せても大丈夫だろう。

そう判断すると、シモーネは手にしていた壺を放り投げ、座り込んだままのリタに駆けよつた。

「大丈夫、リタ？」

彼女の口を覆っていた布を外し、さらに口の中に詰まっていた布も取る。

とたんに激しく咳き込むリタに、シモーネはおろおろと背中をさすった。

「だ、だい…じょぶ…。へいき」

むせながら言うリタの目は、苦しさで安堵で滲んでいた。

「まって、今縄もほどくから」

シモーネは床に落ちていた短剣を拾うと、手と足の縄を切った。力が入らないのか、自由になった後のリタは床に倒れそうになる。

「わ、リタ！」

慌てて抱き留めたシモーネに、リタがしがみついた。

「うっ、何無茶してるのよ、シモーネ。危ないよ。怪我したらどうするの！」

「だって！」

いきなり怒鳴りつけるリタに、シモーネが鼻白む。

「だって、心配だったんだよ！ リタに何かあったら、わ、私……」
ふいに言葉が途切れ、次の瞬間シモーネの瞳から涙が溢れた。

「殺されてるかもしれないって、もしそうになったら、どうしようって……怖かったよ」

普段、泣いたりしないシモーネの様子に、リタは動揺する。

リタよりほんの少し早く生まれた彼女は、いつでもリタのお姉さんのように振る舞っていて、泣き虫の彼女を慰める方だったのに。

こんな彼女を見るのは、随分久しぶりのような気がする。

「ごめん」

心配をかけたのだと。

自分が思っているよりずっと、シモーネを心配させていたのだといまさら気付く。

「ごめん、シモーネ。それから、助けに来てくれてありがとう」
「うん」

まだうまく入らない手に、力を込める。

「本当は、怖かった」

「うん」

言っているうちに、リタの目からも涙がこぼれてきた。

短剣を突きつけられているときも、リヒャルトがシャルとテオドルに無謀な要求をしたことも、怖くてしかたなかった。

全部、自分が捕まってしまったせいだとわかっていたから。

「もう、シモーネやみんなに会えないんじゃないかって思うと、怖くて怖くて、どうしようもなかった」

「うん。もう大丈夫だから」

シモーネがあやすようにリタを抱きしめて何度もその言葉を繰り返す。

ああ、生きているんだ。

助かったんだ。

シモーネの言葉と温もりに、やっと実感が沸いてきて、リタは彼女にしがみついたまま、泣き続けた。

「あれ？　なんだか変な展開になってるぞ」

「何がですか？」

落ちていた縄で、リヒャルトを縛り上げたシャルが、怪訝そうな顔でテオドルを見る。

テオドルは、リヒャルトが倒れてすぐに、残った敵がいなかったのか、小屋の中を確認するために部屋から出て行ったはずだ。

戻ってきたのなら、男を縛るのを手伝ってくればいいのにと、文句を言おうとしたのだが、テオドルはぼけっと突っ立ったままだ。

「この場合、助けに来た俺にありがとって抱きつく展開じゃないか？」

「ですから、何が？」

「あれ」

テオドルが指差した先に、抱き合って泣くリタとシモーネがいた。

「まあ、なんだか微笑ましいですわね。無事がわかって安心したのでしょうか」

「……姫さん、なんだか納得いかない」

何を期待していたのやら、とシャルは呆れたようにテオドルを睨む。

「とにかく、外で気絶している男たちをなんとかしないと、目が覚めるとやっかいですわ。さあ、仕事仕事！」

なおも不服そうにぶつぶつ言うテオドルを、部屋の外に押し出しながら、シャルは彼に見えないように苦笑した。

外に転がっていた男たちを縛り上げ、全員を小屋の中に押し込む頃には、リタとシモーネは泣きやんでいた。

二人は寄り添ったまま、運び込まれた男たちを見つめている。

「あの、この人達はどうするの？」

おずおずとそう切り出したのは、リタだった。

黒装束の男たちは、リヒャルトを含め、それなりに人数もいる。

いつまでもこのまま小屋に閉じ込めておくわけにはいかないだろう。

「ああ、雇い主に連絡しているから、そのうち引き取りに来ると思う」

近くの村にいるはずの、雇い主との繋ぎの人間への伝言を神官長に頼んできている。

「雇い主のやつは、前から神殿と対立していたからな。大喜びすると思うぜ。あいつらに一泡吹かせてやれるって」

彼らはこれから詳しく取り調べられるはずだ。その後の処分などは、中央にいる雇い主次第だが、そこはもうテオドルが関知するべきことではない。

「まあ、あの人ならば、神殿がうまく言い逃れしようとしても、リヒャルトが単独犯だと言い張っても、うまくやるでしょうね。それを間近で見られないのが残念ですわ」

シャルとテオドールの笑顔は、どこか黒かった。

その顔が、今一番怖いかもしれない。

リタとシモーネは、顔を見合わせながら、同じことを考えていた。

15・事件の後

それからしばらくして、中央にいう雇い主からテオドール宛に手紙が届いた。

そこには事件の詳細と、しばらくは襲撃はないだろうということが記されていて、リタは安堵する。もうあんな怖い目に合うのは嫌だ。

「それにしても、長い手紙だよね」

シャルが手に持つ手紙を覗き込みながら、リタは首を傾げる。

あまりにも事細かに書かれているため、読むのにも時間がかかったのだ。

「ええと、要するに、神殿側は、王太子殿下がいつまでもぐずぐずと言い訳して結婚を引き延ばし、何かにつけて部屋に引きこもるのは、シャルに未練たらたらだからって思っていたってこと？　で、シャルがいなくなれば、殿下も諦めがつくって、強硬手段に出た」
「ということになるな」

王太子は口では結婚に納得していると言っていたが、神子に対しては、他の貴族令嬢よりほんの少し上の扱い、とう態度だったらしい。

それに加えて、元々体が丈夫ではなかった彼は、続く心労で臥せることも多くなった。

神子は、王太子の見舞いに行きたがったらしいが叶わず、同じように体調を崩した時、シャルは出入り自由だったのに、立場的には同等であるはずの神子と会わないのは、王太子が神子を軽んじているせいではないか——そんな声まで、神殿側に出ていたらしいのだ。

「まあ！　そんなことで、国外追放だったはずのリヒャルトを呼び戻し、わたくしの友達をこんな目に？」

「神殿側もあせっていたんだろう。神子の真偽を問う声が神殿に否

定的な貴族の間に出てきていたしな。王太子殿下が頑な態度を取るの、神子に何か問題があるのではないか、なんてね」

「あらあら。でも、殿下はそこまで考えてはいらっしゃらないと思いますけれど」

ただ単に面倒でぐずぐずしていたに違いない。昔から、王太子は嫌なことを先延ばしにしたがる所があった。

「俺もそう思う。あの人、策略を練るとか、深読みするとか、苦手だしな」

シャルにもテオドルにもそんなことを言われる王太子は、いったいどういう人間なのか。

会ったことはないけれど、会ってみたいと思ってしまうリタたちである。

「それに、姫さんに同情する民が結構多くてさ。姫さんは人気者だからな」。今回の婚約破棄は、姫さんがあまりにも可哀想だって声、結構聞くな」

もちろん、神殿の目があるから、誰も表だっては言わない。

ふとした世間話のついでに話したり、酒場で囁かれたりしているだけだ。

それでも、そういう噂は、くすぶるように消えずに残る。それがいつか、神子の存在そのものへの不信へと繋がるかもしれない。

神殿がそう考えたとしても不思議はないのだ。

「で、姫さんを亡き者にしたいってことになったけど、さすがに元將軍なだけあって、強いしさ。普通に襲えば返り討ちにあうつてのもわかってる。リヒャルトは利き腕が使えないが、闇討ちとか得意だし、目的のためなら手段を選ばない。国外追放の身だから、切り捨てるのも躊躇う必要はないしな。あいつ自身も、姫さん殺害に成功しても、自分が殺される可能性も考えていて、事が終わったら、自分ひとりさっさと逃げるつもりだったらしいぜ」

「なるほど……って、ちょっと待って下さい。今なんだか、將軍って言葉が混じってような……」

聞き流しそうになったが、リタの耳には確かにそう聞こえた。聞き間違いではなかったはずだ。

「あれ、リタは知らなかったのか？ この人、女性で初めて將軍にまで登り詰めた強者」

「えええ、知らなかった」

そういえば、最初の頃、王太子のために強くなったとか言っていた気がするし、目の前の騎士も姫さんは強いと常々言っていた。

単純に、気持ちの持ち方や宮廷での立場のことだと思っていたのだが、どうやら文字通り恋する男のために武術方面で強くなったらしい。

「すごい。というか、シャルかつこよすぎ」

自分が宮廷にいたら、間違いなく憧れるだろう。

「なんだか、もう一生シャルについていきますって感じ」

「……おいおい。なんでそんなに頬を染めてるんだ」

「助けてくれた時のシャル、確かにかつこよかったから」

「え、俺よりも？」

「はい？」

「俺だつて、一応助けに行っただけ」

真剣に問われて、リタは助けを求めるようにシャルとシモーネを見た。

「そついえば、リタが攫われたと聞いたとき、テオったら、作戦もたてずに飛び出していこうとしましたわね」

「え！？」

入ってきた時の彼は、怒っているように見えたが、勢いよく飛び出してきたという雰囲気ではなかった。冷静だったと思っていたのだが、違っていたのだろうか。

あの時のリタは、恐怖と緊張でうまく頭が回らなかったから、見落としていた可能性もある。

「それはもう、ものすごい勢いでしたわ。呼び出されたのはわたくしですのに、テオが一番にかけつけて、どうするつもりだったのや

ら」

「姫さん、余計なことは言うな！」

焦った様子のテオドールに対して意地悪そうな笑顔を向けたあと、シャルはリタの方へ視線を動かした。

「そうそう、リタ。テオドールはしばらくこちらにいるそうですわ。名目上はわたくしの護衛ですけど。よかったですわね離れずにすんで」

最後の言葉はどちらに言ったもののなのか。

「ふふふふ、またあの甘酸っぱい空気を味わえると思うと、嬉しいような、嬉しくないような」

シャルの笑顔が不気味だった。

思わず彼女から距離を取ってしまう。

誘拐されたときよりも、怖い。

「そのうち勢い余って押し倒す場面とか、見れるかもしれませんわね。シモーネはどう思います？」

「でも、神殿の中は隠れるところ、いっぱいあるからなあ。こそこそされると見れないかも」

「まあ！ それはものすごく残念ですわ」

二人が手を取り合って、語りあっている。

瞳もきらきらと輝いているし、気合の入りが普通ではない。

「見てはいけないものを見ている気がします」

「ああ、俺もだ」

これは知らないふりをした方がいいのか。楽しそうな二人を止めた方がいいのか。

どちらにしても、口をはさんだが最後、散々からかわれるのはわかってる。

やはり、そっとしておいた方がいいのかもしれない。

「ところでさ」

シャルたちを無視することに決めたテオドールは、届いた手紙の最後の一枚を見ながら首を傾げる。

「この手紙の最後に、もうすごいことがあるから姫さんをよろしくすることが書いてあるんだけど。どっという意味だと思う？」

「さあ？」

シャルにとっていいことは何だろう。

考えてみるが、リタにはわからなかった。

16・王太子とお姫さま

それから、さらに数日たった。

手紙に書かれていたように、その後まったく襲撃はなく、穏やかな日が続いている。

シャルは、中央といろいろと連絡を取り合っているようだが、まだここから動く様子もなく、テオドルも護衛兼神殿内の雑用係として、そのまま滞在し続けている。

いつまでも、こういう日々が続けばいいなとリタやシモーネが考えはじめていた時、それは起こった。

ここしばらく、曇り空も多く気温も下がり気味だったのだが、久しぶりに天気の良い日だった。

買い出しのために少し遠い村まで出かけていたリタは、神殿に近い山道で、息も絶え絶えという感じの男が1人、倒れてるのを見つけたのだ。

褪せた金の髪は薄汚れているし、服もぼろぼろ。ズボンには葉っぱや泥までこびりついている。

あわてて近づくと、リタの気配に気がついたのか、男はわずかに身じろぎした。

「大丈夫ですか？ 立てますか？」

けれども、声を掛けてみても、うーと言うだけで、それ以上の反応はない。

「大変！ 人を呼んできますから、少し待っていてください！」
神殿はすぐそこだ。

テオドルならば、男を担いで神殿に運んでくれるだろう。

幸いテオドルは入り口近くで薪を割っていた。

慌てた様子で駆け込んできたリタの話を聞くと、すぐに走り出す。

そして、倒れている男を抱き起こした瞬間、驚いたように固まってしまう。

「王太子殿下!？」

「え、ええ？ 王太子様？」

リタも釣られて大声を上げてしまった。

「な、な、なんで、王太子様がこんなところで倒れているんですか」「俺が知るかよ。とにかく、すぐに神殿に運ぼう」

テオドルが、軽々と王太子を担ぎ上げる。

荷物みたいで、ちよつと気の毒だと思ったが、そんなことを言っている場合でもないのだろう。

それに、テオドルが王太子をお姫様抱っこなどすれば、夜夢に見てうなされそうだ。

「リタ。悪いが、先に言つて、神官長に知らせておいてくれ。それから寝台の準備も」

「わかりました」

どうやら、まだまだ一波乱ありそうな雲行きである。

走り出したリタの頭に浮かんだのは、そんなことだった。

「フェリクス様！」

名前を呼びながら部屋に飛び込んできたのは、シャルだった。

いつもは冷静な彼女なのに、よほど焦っていたのか、服も髪も乱れている。

「大丈夫なのですか？」

念のためということでもベッドの上だが、にっこりと笑った王太子は、やつれている以外は元気そうに見える。

「えーと、どうやら、お腹が空いていたみたいで」

ものすごい勢いで目の前の料理を平らげていくフェリクスの横で、リタが何故か申し訳なさそうに言う。

「お腹が空いていたって…… いったいどういふことですか？」

「お金が尽きて、昨日から何も食べていないんだとさ」

テオドルも、困った顔を浮かべている。

「護衛もつけずにここまで来たみたいなんだけど」

シモーネが溜息をつきながら言った。

「よく無事でしたね。このあたり、強い魔獣が出ることがあるから危ないですよ。1人でなんて、ムチャクチャです！」

王太子は、剣の腕もそこだし、体力も人並み以下だ。

誰がどう考えても、無茶な行動としか思えない。

「早く君に会いたかったんだよ」

だが、当の本人は、まったく反省の色もなく、笑顔のままだ。

「だからといって、王太子ともあるうものが、こんなところへ1人で来るなど、もつての他です！ 誰かにちゃんと行ってきたのですか？ まさか勝手に抜け出したなどということは……」

そこまで言つて、息が切れたのか、無事な様子を見て安心したのか、シャルは深いため息とともにへなへなと床に座りこんだ。

「あなたならやりそうですけど、それにしても、警備のものは何をしていたのでしょうか。ああ、でもあなたを1人で出したなんて、誰か処分を受けるのでは……」

いろいろなことを考えすぎたのか、シャルの顔が段々青ざめてくる。

今までの冷静沈着な彼女しか知らないリタたちにしてみれば、その反応は驚くと同時に、可愛らしくも感じられた。

「あ、心配しなくて大丈夫だよ、シャル」

王太子が手を伸ばして、シャルの頭を撫でる。

「私はもう、王太子ではないんだ。全てを弟に譲ってきた。父を説得するのに時間がかかってしまって、こんなに遅くなってしまったけれど」

「は？」

大声を出したのは、テオドルだった。

それ以外の女性陣は今の言葉に、皆固まっている。

「辞めたって、そんなに簡単に辞められるものなのですか、フェリクス様」

王太子任命にも廃嫡にも、それなりの手続きと理由が必要なのは。辞めたいと言ったからといって、簡単に通るものではない。

それに、彼が王太子になった経緯には国王とシャルの父親の思惑が絡んでいる。

彼らが、理由もなく納得するとは思えない。

「よく陛下がお許しになりましたね」

「同じ母親から生まれたとは思えないほど、弟のフリッツは優秀だからね。私が王太子になったときは、まだ幼すぎるという理由があったけれど、あの子ももう成人した。若すぎるという理由で反対は出来ないだろう？　なにしろ、私は父もあきらめるくらい出来が悪いからね」

確かに、フェリクスが正式に王太子となった時にはまだ弟王子は5歳にもなっていなかった。

「では、神子との結婚はどうなったのですか？　まさかフリッツ様が……？」

神殿側は、強く王族との結びつきを望んでいたはずだ。

例え、フェリクスが王太子でなくなっても、王族であることに代わりはない。結び付きだけを考えれば、それでも構わないと思うはずだ。

どうしても神子を将来の国母にしたいのならば、新たな王太子と婚姻関係を結ぶという方法もある。

「私も、結婚に関してはどうなるかわからなかったんだけどね。今回の事件のせいで、神殿側も分が悪いことになったんだよ。神官見習いとはいえ、正式に神殿に所属する人間を傷つけただろう？　そこら辺からねじ込んで、弟がうまくやってくれた。私との結婚も、フリッツとの結婚の可能性も白紙。あの子はやっぱりすごいよ」

「神子は、それで納得をしたのでしょうか？」

神子はフェリクスを慕っていた。

彼と話をするたびに、頬を染める姿をシャルも何度か見ている。

淡い恋心くらいは抱いていたのかもしれない。

それに神子は、この世界の人間とはどこか違う考え方をする少女だった。貴族や王族同士の政略結婚が当たり前の世界で、これが駄目ならこつちを結婚相手にと言われて、納得できているとは思えない。

「彼女は不思議な考えを持った子だったからね。たぶん怒ってはいと思う。もしかすると、恨まれているかもしれないなあ」

自分は、最初から政略的な結婚だと理解していた。

だから、そういう態度で神子に接していたし、神殿側に完全に取込まれなくなかったから、深く彼女に踏み込むつもりもなかった。結婚してしまえば、それなりの情は沸くだろうが、それが愛情に変わるかどうかは、誰にもわからないのだ。歩み寄れるかもしれないし、表面上の付き合いのみになるかもしれない。自分とシャルの関係のようになくても、国王と王妃が共に歩む姿に国民が納得すればいいだけの話だ。

「考えてみたら、神子は、私たちに比べて、ずっと可哀想な存在なのかもしれない。——正しい情報なんて、何ひとつ与えられず、耳に心地よいことしか聞かされないのだから」

神子はせまい世界の中でしか生きることを許されない存在。

清らかで神秘的であることのみを望まれ、自由さえない。

だから、神殿側は神子に全てを教えない。この世界に望まれ慈しまれる存在なのだと教える。それは神子に対する人々の思いの一面を伝えているに過ぎないのに。

あなたは唯一の尊い存在で、世界に愛されて——そんな嘘をつく神殿は果たして正しいのか。

だが、本当のことを教えられて、神子が耐えられるのかと言われれば、リタにもシモーネにも、答えは出せない。知らない方が幸せということはあるのだ。

ただ、真実を知らず、真綿でくるまれたように大切にされたいと

は思はない。嘘をつかれて、それを後から知った方が、ずっと辛くて苦しいと思うからだ。

「神子は、それほど愚かではありませんよ。いつか、自分の置かれた状況に気が付く日が来るのではないかと、わたくしは思っています」

そうあつてほしい——そして、強くしたたかになつてほしいというくらいには、シャルは神子に同情はしているのだ。

「気が滅入る話は、ここまでにしよう。ここでどれだけ神殿と神子のことを考えても、もう私たちにはどうしようもないのだから」
フェリクスの言う通りだった。

今後、もう神子と関わることなどないのだろう。

ここは辺境の神殿で、殆ど表に出ない神子が訪ねてくることなどありえない。そもそも、崇めている神からして、まったく違ふのだ。「それに、私たちは自己紹介もまだだった気がするよ」

王太子の言葉に、そういうえば、目が覚めたたとんこの人が言ったのは『お腹が空いた』だったことを思い出す。その後はひたすら食べ物と口を運んでいたから、自己紹介どころではなかった。

「ええと、君たちがリタとシモーネだね。弟経由でいろいろ聞いているよ。会えてとても嬉しい」

傍らでシャルたちの様子を窺っていた少女二人に、フェリクスが笑いかけ、手を差しだした。

だが、二人は、驚いたように目を丸くして、彼の指先を見つめている。

「あれ？ 握手は、初対面の人と親しくなるのに必須だつて教えてもらったんだけど。違った？」

同じことを前に聞いたことがある。

シャルと初めて会った時のことを思い出し、リタたちは吹き出した。教えた人間はきつと同じなのだろう。

「大丈夫です、殿下。ちゃんとあっていますよ」

リタが笑いながら答え、シモーネがまず王太子の手を握り替えし

た。

「あ、殿下はやめて。廃嫡された身だし。——まあ、王族つてのは消えないけど、ここではあまり関係ないよね」

「でも」

「シャルのことは、シャルって呼んでるんだよね。だったら私のことも、リックスでいいよ。親しい人は、みんなそうだから」

「じゃあ、ええと。リックス……さん、で」

「うん。あ、シャルも、もう敬称などつけなくていいからね。ここは王宮じゃない」

「わかりました、リックス」

につこりと微笑んだシャルが、立ち上がってフェリクスを見下ろす。

その笑顔には、喜んでいるというものとは違う何かが見て取れた。

「でも、それはそれ、これはこれ、ですわ」

「え、何？ 怖い顔だよ、シャル」

「私に会いたかった、というのは純粹に嬉しいですね。でも、無茶をする理由にはなりません」

「う。やつぱり？」

しょんぼりと肩を落として、フェリクスはうなだれた。

「いいですか、そもそも王族として——」

始まったのは、どう聞いても説教。

そして、シャルの説教は長かった。ただただ長かった。

何故か付き合わされたリタたちは、怒られているのが自分ではなくて本当によかったと心底思った。

こんな説教に耐えられるフェリクスは、ある意味大物かもしれない。少なくとも、リタたちには無理だ。

シャルの説教は恐ろしい——しばらくの間、リタとシモーネとテオドルの間で、決して彼女だけは怒らせるなという言葉が、囁かれていたという。

17・幸せをみんなで

「ああ、久しぶりに聞いた気がするな、シャルの説教」

長い説教が終わった後のフェリクスは、幸せそうな表情を浮かべている。

最初は確かに神妙な顔をしていたはずだ。

うなだれ落ち込む様子に、リタたちは同情さえした。

だが、今はどうだろう。

怒られていたはずのフェリクスは、顔を上げ、目の前のシャルをじっと見つめている。

何故そんなに嬉しそうなのかと問い詰めなくなったリタたちだが、シャルの矛先がこちらに向いては困るので、沈黙を貫いた。

それに、今は二人の邪魔はしない方がいい。

シャルは言いたいことを言った後だが、フェリクスの方にも、話したいことはたくさんあるだろうから。

「シャル。君に聞いてほしいことがあるんだ」

シャルから視線は逸らさず、フェリクスは語りはじめる。

全ての思いを吐き出すかのように。

「私はね、ずっと王宮で考えていたんだ。どうやったら君と一緒にいられるのだろうか」

まわらない頭で、必死に考えた。何が一番いいのか、何をすればいいのか。

シャルは、側近でもなんでもいいから側にいたいと言ったが、本当にそれでいいのだろうか？

自分は、シャルとどうなりたいと望んでいたのだろうか。

ただ傍にいればいいのか、それだけで満足するのか。

「かつては王子である自分だから、君もついてきてくれるのだろうか
と思っていた」

二人が婚約したときは、まだ互いに子供だったから、これが政略

結婚だと頭ではわかっていても、感情ではよく理解できていなかった。

フェリクスもそのころはまだ王太子ではなかったし、母親も、寵姫と呼ばれてはいるがたくさんいる側室の一人にしかすぎず、そんな自分の婚約に、なんらかの意図があるなどとは、考えてもみなかったのだ。ただ、婚約前から知っていた年の近い女の子が、フェリクスと一緒に遊んだり話をしたりすることの方が嬉しかった。

気が強く、男の子のように剣を持って駆け回るシャルは、フェリクスの憧れだったのだ。

強くて奇麗で、まるで風のように——幼い彼の憧れが淡い恋心に変わるのに、さほど時間もかからなかった。

だが、シャルはどうだったのだろう。

手の掛かる泣き虫のフェリクスにいらいらして、喧嘩になったこともある。

それでも、彼女は自分を見捨てなかった。父親さえもあきらめるほど愚鈍な自分に、辛抱強くつきあってくれもした。

それは、政略結婚が当たり前だと育てられてきた彼女が精一杯歩みよってくれているおかげなのだと、卑屈に思っていた時期も確かにあったのだ。

でも、そうではないと気がついたのはいつだったのか。

最初は、彼女もフェリクスと仲良くなろうと努力をしていたのかもしれない。何かあるとすぐに喧嘩になっていたのが、その証拠だ。何度もぶつかるところに、いつのまにか喧嘩は少なくなり、一緒にいることが当たり前になり、そして。

「君は私が誰であっても、共にありたいと言ってくれた」

それを聞いた時、どれほど嬉しかったか。

彼が出来ない事も、優柔不断なことも知っているのに、それでもいいと言ってくれたのだ。

ゆっくりでいい。

二人で一緒に生きていこうと、そう誓いあったというのに。

太陽神の神殿に神子が降臨したという事実が、二人の関係を変えてしまった。

けれども、と今になってフェリクスは思う。

いくら神殿にこり押しされたとはいえ、断る口実など幾らでも作れた。

フェリクスは王子なのだ。神殿とは対等であるはずなのに、それすらフェリクスには利用できなかった。

もっと優秀であれば、よい方法を考えついたかもしれないし、もっと愚鈍であれば愚かな行為に走ることも出来たかもしれない。

何もかも中途半端だった彼は、結局、最悪の事態を自ら招いてしまった。

そのことに気が付づき、彼は真剣に考え続け、辿り着いた結論はひとつ。

「捨てられるものならば、全て捨て去って、君のところに行きたい。それが私の答えだと、やっとわかったんだよ。——本当に王子としては失格だね」

国のために尽くすのだと思っていたのに。

そうするべきだとわかっているのに。

それが出来ないと知ってしまった。

だから、全てを優秀な弟に譲ろうと思ったのだ。

もちろん、それを弟に打ち明けたとき、当然のように反対された。王族の責任について、シャルと同じように弟は説教までした。だが、彼の決意が固いと知ると、諦めたように笑ったのだ。

「弟が——フリッツが言ったんだ。『本当のことを言うからね。俺は前から国王になりたかった。だから、兄上をその地位から引きずりおろす機会をずっと狙っていたんですよ』って。馬鹿だろう？ 悪者みたいなことを言うんだ、あいつは」

フェリクスの思いを知った弟は、彼が罪悪感を持たないようにと、そう言ったのだろう。

全てを押しつける駄目な兄だというのに。

「ねえ、シャル。こんなにも馬鹿で愚かな私のことは嫌いだろうか？」

こんな選択肢しか選べない自分を、シャルが見限ってしまったても仕方ないと思っている。

それでも、聞かずにはられない。

「何もないのは、私も同じです。愚かなのも、馬鹿なもの」

感情に流されて、馬鹿な行動をしてしまったのはシャルも同じだった。自分はもっと冷静だと思っていたのに、愛する人を失うかもしれないという思いに、愚かな選択を彼女もまた選んでしまったのだ。

「わたくしを——貴族でも將軍でもないただのシャルロッテであるわたくしを、お側においてくださいますか？」

微笑んだシャルは、奇麗だった。

まっすぐにフェリクスを見る目に、迷いはない。

「もちろんだよ」

「嬉しいですわ」

シャルが、フェリクスに抱きついた。

その体をおずおずと抱きしめ返したフェリクスの顔がほころぶ。

幸せそうな二人に、それまでのなりゆきを見守っていたリタたちの顔も緩んだ。

「これはよかったというべきなのか、これからのことを考えると大変というか」

テオドルの呟きに、リタが傍らの男を見上げると、彼は唇をほんの少しあげて、面白そうに笑っていた。

「いいんじゃないの？ だいたい、あの人、本当に王様に向いていなさそうだしさ」

シモーネが、気も弱ければ押しにも弱そうなフェリクスに対する印象を正直に言った。

見た目だけではない。

寝台から下りようと足を床につけたとたん、フェリクスはわずかな床の凹みに、お約束のようにひっかかって転んでしまう。

シャルが、あらあらまあまあといいながら、立ち上がるうとするフェリクスに手を貸しているが、あのくらいで転がるなど普通はありえない。

「運動神経も皆無だからなあ、あの人」

かつて王宮内で見たフェリクスの様子を思い出して、テオドールが苦笑した。

「それでも、シャルのために、ここまで来たんですよね」

剣も苦手で、気が弱くて、人の意見に流されるような人なのに、たった一人のお姫様のためにここまで来た。

周りを説得してまわるなんて、今までしたことがなかったことさえ、やってのけた。

「物語の王子様より、ずっとかつこいいと思いますよ」

「……かもな」

王太子としては失格かもしれないけれど、恋する男としては正解なのかもしれない。

「俺も、そろそろ将来のこと、考えないとなあ」

ふいにテオドールがそんなことを言いだした。

「前に聞いたんだけどさ。ここ神官長が神殿を護る剣士を募集してるらしいんだよな。最近魔獣がうろついていて危ないからってさ」

騎士なんてやめて応募してみようかな、そう言っただけ天井を見上げた彼の手が、リタの手に触れ、そっと繋がれた。

大きくてこつこつとした手は、少しだけ汗ばんでいた。緊張しているのかもしれない。

「そうですね。テオドールさんが護衛剣士になってくれたら、安心です」

「本当に？」

「本当ですってば」

「本当かなあ」

「なんで、そんなに疑ってるんですか」

「不安なんだよ。本当はそれほど俺がここにいることを喜んでくれないんじゃないかって。変な奴に恨まれてる男だからさ」

そう言った彼の顔があまりにも情けなかったから。

リタは握る指先に力を込めた。

「私だって、不安です。だって、テオドルさん、いっぱい女の人を泣かせたって話だし。この辺りは、若い女の人もないから、いつか飽きて出ていっちゃうんじゃないかって」

「いや、だから、それは」

視線をテオドルに向けると、見上げたままの彼の顔が強張っていた。

「……言い訳になるから、そのことについては何も言わない」

「なんだか、真面目ですね」

「真剣だからな」

ぼそりと聞こえた声は照れ隠しのせいか、とても小さかった。

「本気だから、嫌われると立ち直れない」

「嫌ってませんよ」

「本当に？」

「本当ですってば」

「それならば、これから俺のこと好きになってみるってのは、あり？」

リタの目が丸くなる。いきなりそんなことを聞かれて、今言葉で即答など出来るわけがない。

「そ、それは。テオドルさん次第です」

リタは、かろうじてそれだけ口にしたのだが。

「そうか？ だったら、頑張ってみるかな」

「何を頑張るんですか！」

「いろいろ？」

にやり、と意地悪い笑みを浮かべたテオドルの顔が間近にあっ

て、リタは一步後ろに下がろうとした。

繋がれた手がしつかりとリタを掴んでいたから、実行できなかったけれども。

「楽しみだなー」

「な、何がどう楽しみなんですか！」

「だから、いろいろ？」

疑問系なのは何故なのか。

それに、そんなに見つめられたら、困る。

顔も近すぎだ。

もう少し離れてほしい。そう告げようとリタが口を開きかけた時だった。

「え、ちょっとちょっと！ 私ひとり置いてけぼりで、皆、良い雰囲気になってるよ。こういうこと？ どうなってるの？ 寂しいじゃない！」

大げさな口調でシモーネが叫んだものだから、全員が我にかえって、彼女の方へと振り返った。

どの顔にも浮かぶのは笑顔。

このまま。

幸せな気持ちのまま、明日がくればいい——明日だけではなく、ずっと先の未来まで。

皆が思う願いは、きっとただひとつだ。

その数日後、神殿に新しい神官見習いと護衛剣士が増えた。

わけありな彼らは、毎日いろんなことに失敗したり大騒ぎしながら、それでも楽しそうに笑っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1531u/>

大地に祈りを

2011年8月25日03時27分発行